

備後
名所

鞆
津と
阿伏
兔





(りよ角北醉仙) 島天辨



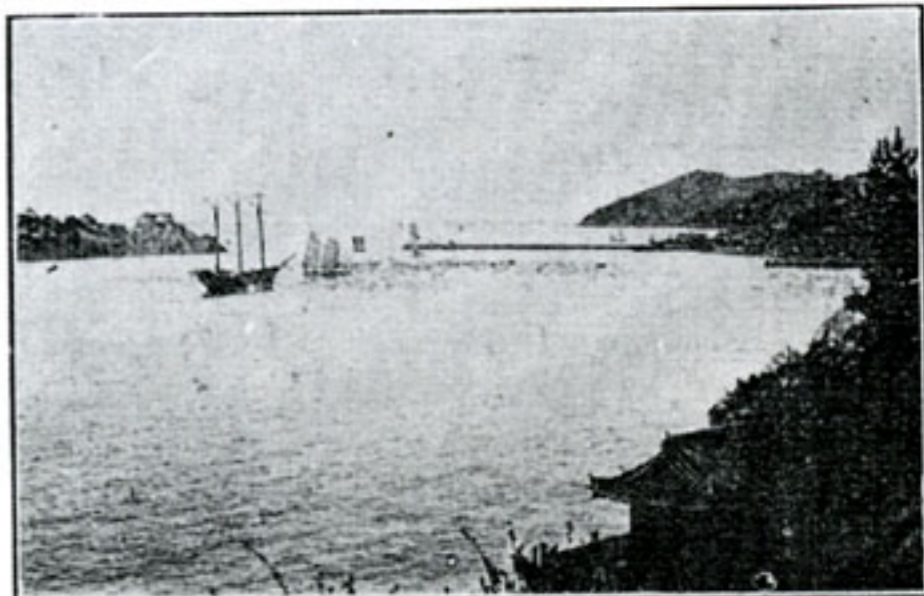
望眺の山彌醉仙



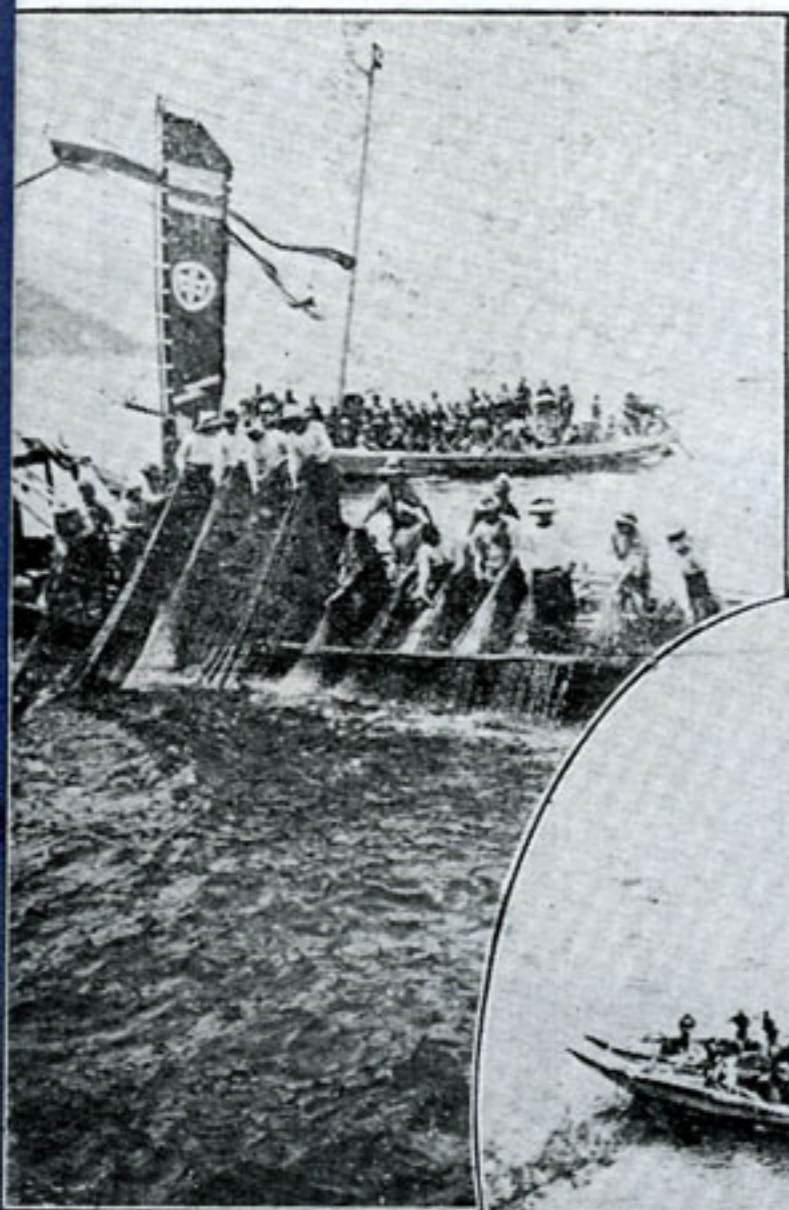
(山園祇方左・醉仙後・害要端右・山城古央中) 景全之港鞆



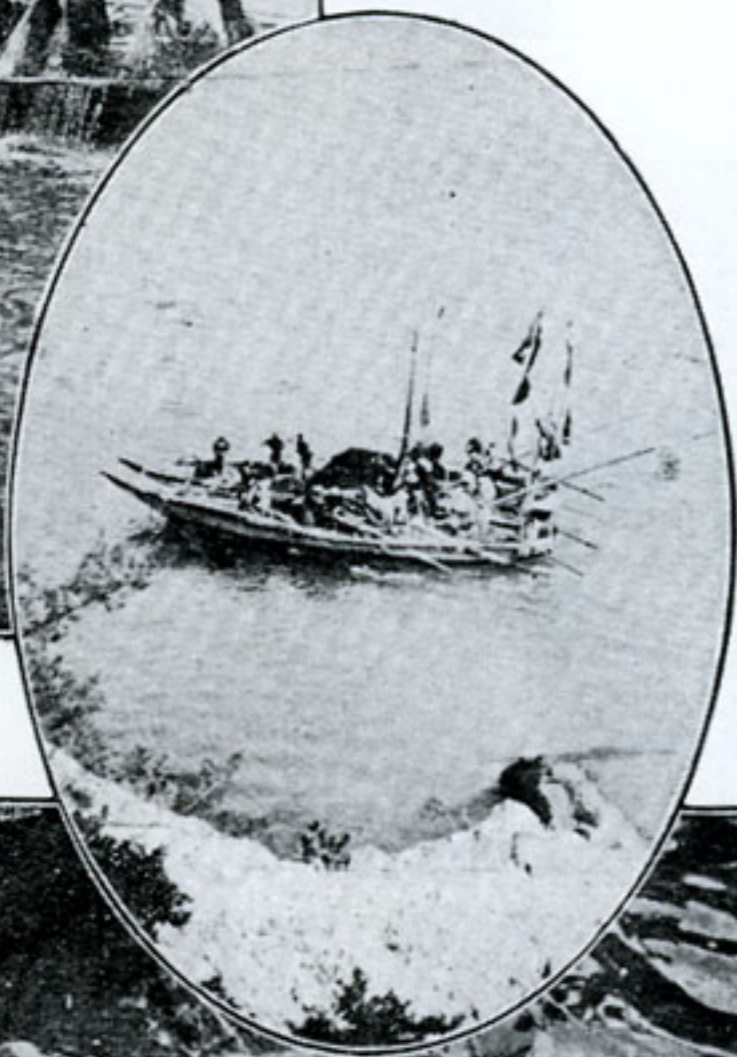
(近附亭霞吸) 景雪の島醉仙



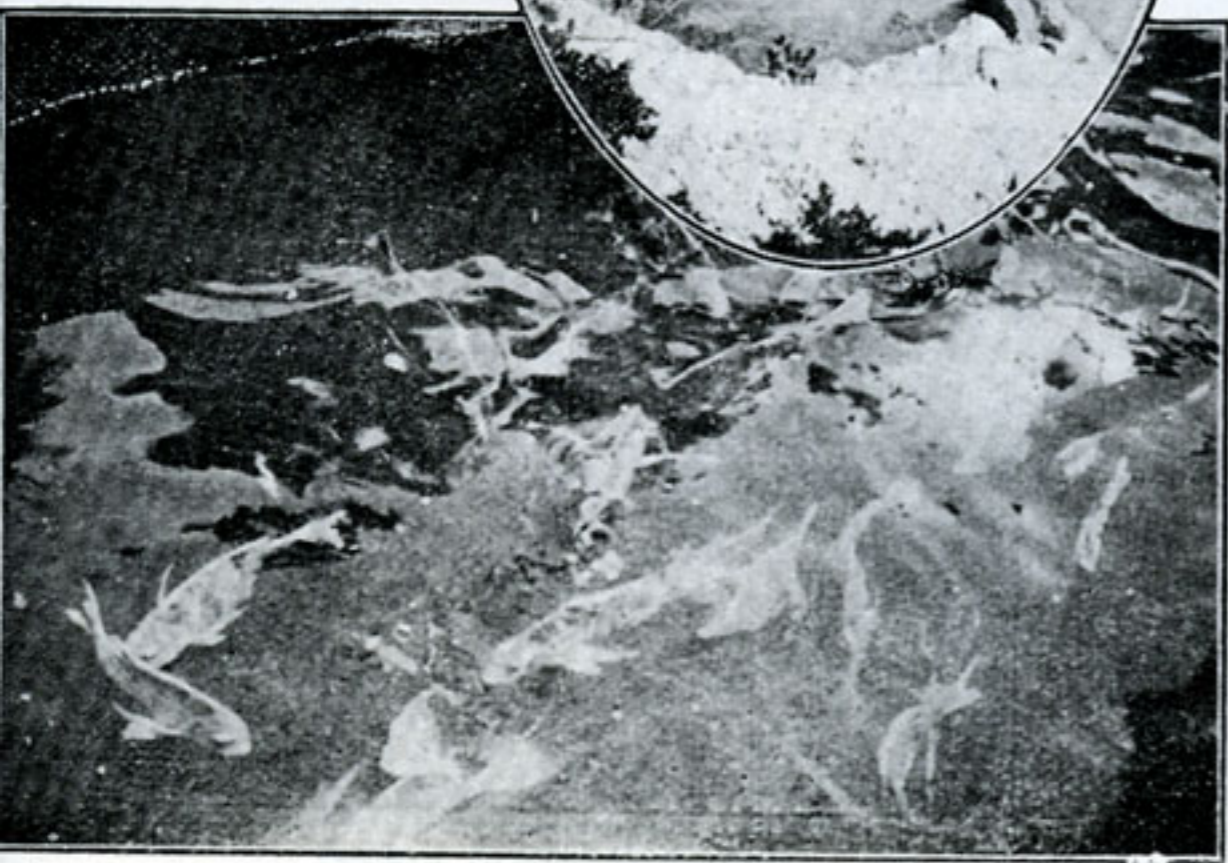
む望を島津玉りよ害要



鯛網引揚と遊覧船



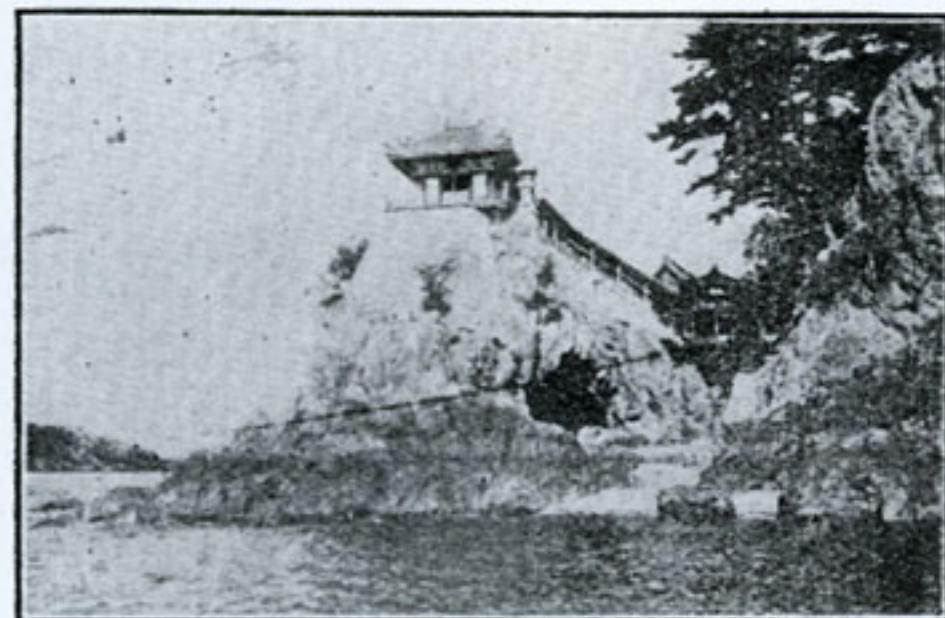
鯛網船の出漁



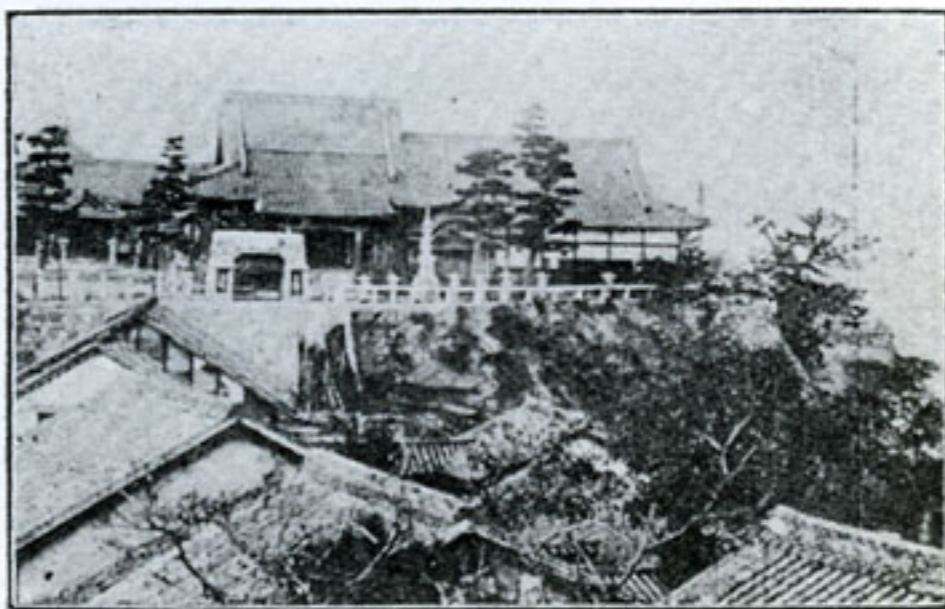
鯛るた潮瀬の中瀬



沼名前神社



阿伏兔大慈悲閣



對潮樓



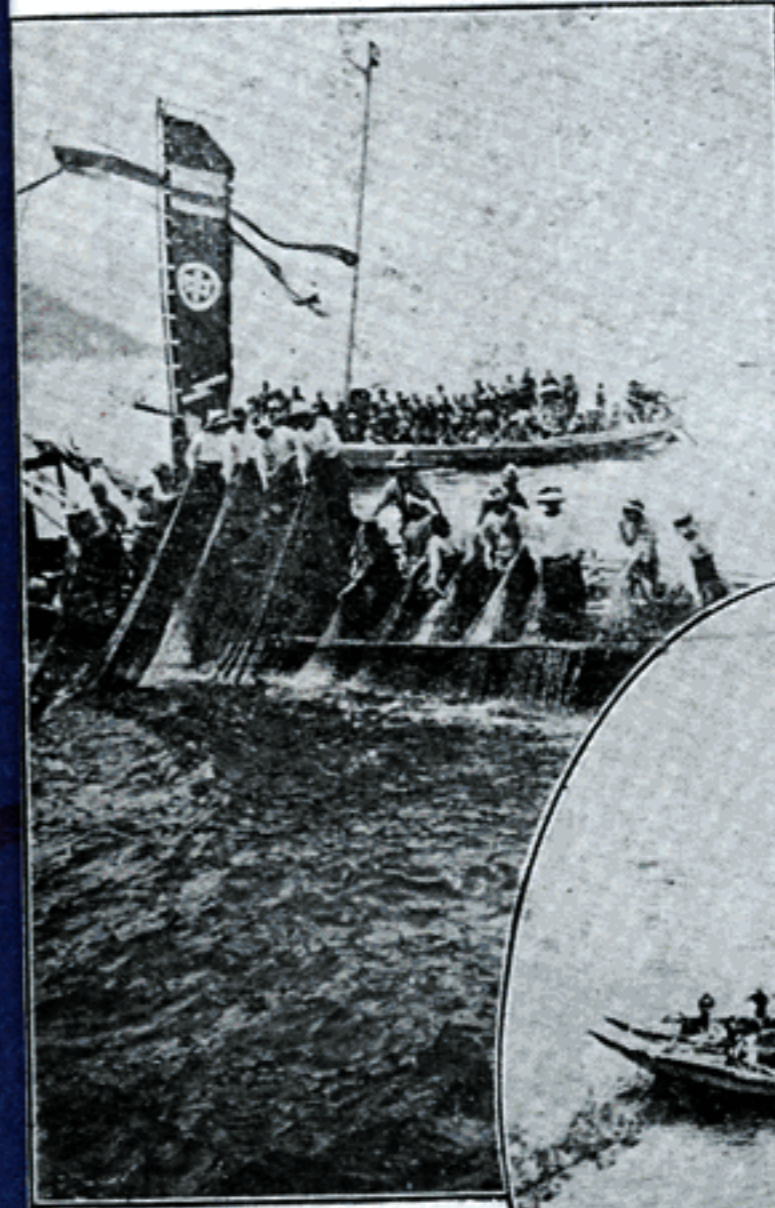
御一家團樂の
晚餐には
ぜひ **卍** の保命酒
を！



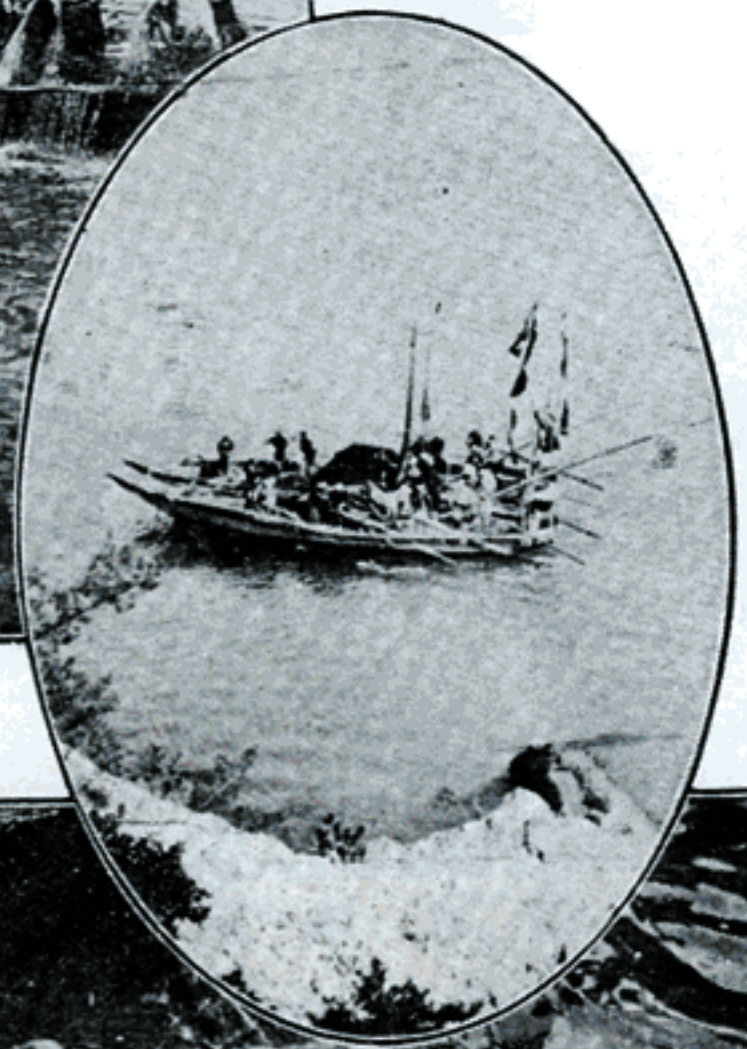
天下無双
海内無敵
味地黄保命酒
岡本保命酒合會社
岡本元四郎吟醸

港 鞆 後 備
社 會 名 合 酒 命 保 本 岡

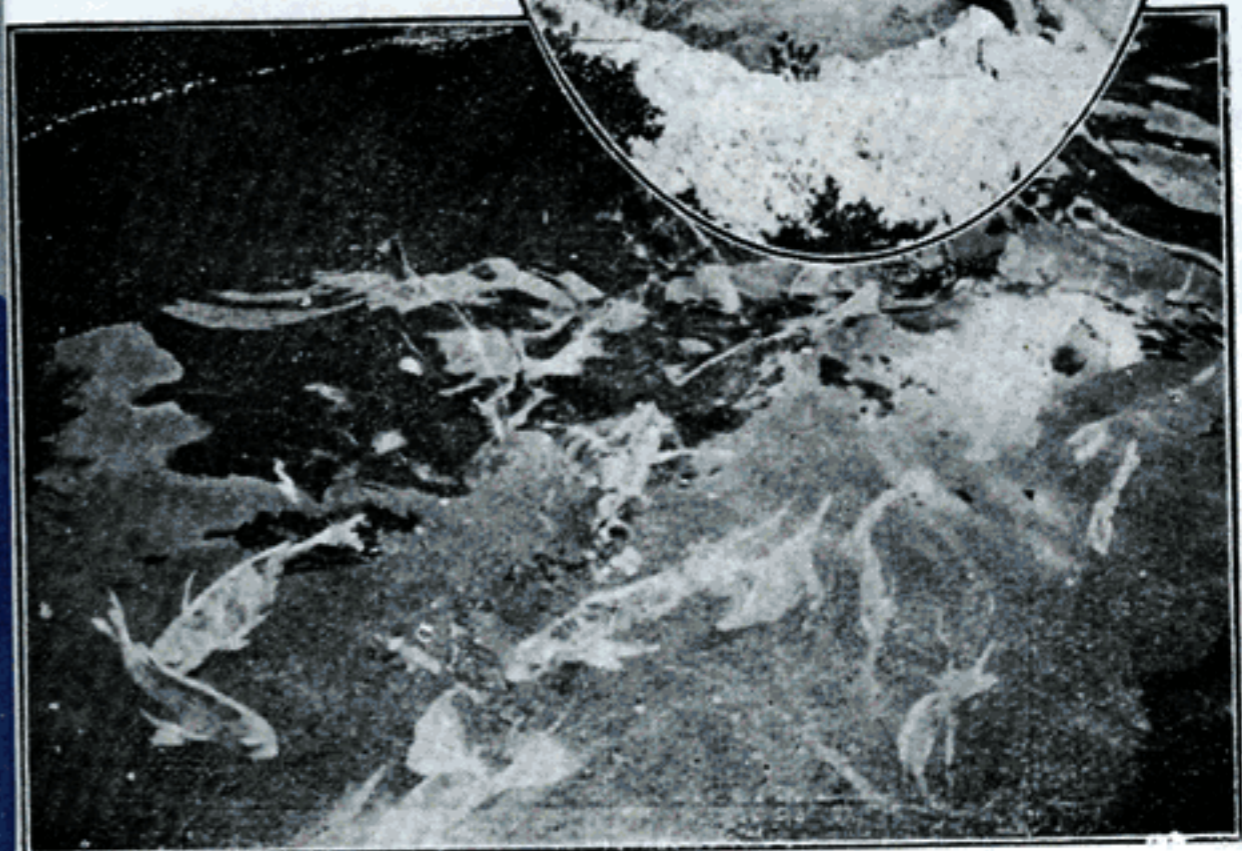
釀 謹 郎 四 元 本 岡



鯛網引揚と遊覽船



鯛網船の出漁



鯛るた瀬瀬の中瀬

春季名物網網見物

▼日本名勝地中の優勝區



▼瀬戸内海大公園のハート

旅行に 探勝に 寫生に 釣魚に 避暑に 避寒に

鞆へ!!!

鞆津保勝會

鞆町役場内
電話 二二八〇番

【特色】

○名勝と史蹟とを併有して居る
○海に陸に交通の便が備はつて居る
○一日の清遊によく數日の滞在亦佳
○冬は温に夏は千斛の涼味溢る

【備設】

町營簡易食堂
各種繪葉書
春季鯛網見物
海水浴場
仙醉島阿伏兔廻遊船
仙醉島大運動場
貸家貸間建設

酒藥



傳神

總本家保命酒

天 忝 覽

賜宮内省御用命
帝國醫科大學御用品
藥學博士下山先生御証明

マルホン保命酒ハ

最古ノ歴史ト最上ノ品質ヲ有ス
世人ハ曰ク

保命酒ハ「マルホン」ニ限ルト

此ノ歴史此ノ名聲ハ

凡テヲ証明ス!

醫學士岡本武次先生証明
於博覽會共進會品評會
有効一等金賞牌受領

岡本保命酒合名社會

代表者 岡本元四郎 謹釀

振替 東京一三六一番 大阪二六六番 長電話一一番

金健康と智慧さは人生の
言二大幸福なり (西諺)



四博士完成
科學的優秀

仁丹のハミガキで

歯を丈夫にするは

健康に入るの門

人生長壽を享くるの鍵

胃腸の強健を計るは

仁丹のんて

備後本口疊表の特色



年産額三百萬枚價額五百萬圓

一番古き歴史と他の模倣し得ざる
特色を有せる備後本口疊表の本家
本元は沼隈郡内産である

備後本口疊表同業組合

事務所 山陽線松永驛前

原料卓越、色澤優秀、製織精巧耐久
力に富めるは備後本口疊表に限る

帝國大學史料編纂官文博 和田英松先生序
 廣島高等師範學校教授 長沼賢海先生序
 沼隈郡編纂

特價一部七圓 小包料三十六錢

天賜 覽 沼隈郡誌

編纂委員が十年苦心の結晶にして資料の精密と編輯法の斬新なるは、郷土史中の白眉と云ふも過言にあらず。歴史家は勿論圖書館には得難き參考資料である。

- ▽洋装函入、天金總クロース全一冊
- ▽新綴ポイント及六號活字千二百頁
- ▽口繪十頁、數度刷地圖三種
- ▽寫真版四百餘箇、用紙上等

濱本鶴寶著

備南之名勝

- ▽四六版二百五十頁
- ▽寫真版七十餘箇
- ▽定價上製一圓
- ▽郵稅六錢

萩を中心として備南一帯に於ける名所、舊蹟物産の由來現状等を紹介せる案内記である。

兼田高洲著

田島村誌

附吉備高島宮趾

- ▽菊版百四十頁
- ▽地圖寫真版入
- ▽定價七十五錢
- ▽郵稅四錢

本書は町村誌中の一異彩である。殊に吉備高島宮趾に關しては古來學者間に異説多し本書は著者の一家言として學界に貢獻する所尠からざるを信す。

金原利道氏序

先憂會編纂

備後 名所 鞆津と阿伏兔

先憂會出版部發行

廣島縣沼隈郡松永町 發行所 先憂會出版部
 振替大坂一三六三番

鞆浦は古へ神功皇后三韓征伐より凱旋の時、沼名前の社に鞆を納め給ひし古事によりて
 其名起りたる内海の水驛にして、東は兵庫西は下關の中間に位し、政治軍事交通商業等の
 上に於て樞要なる地位を占めたる良港にして、港内常に千石船に満ち物貨集散して頗る殷
 賑を極めたり。
 而して又山水の景勝に富めるを以て歌枕の名所として奈良朝以來夙に歌人騷客の爲に謳
 はれ、風雅の士必ず一度は杖を此地に曳きて吟詠樂んで歸るを忘るこいひ、三韓の使節李
 南岡によりて日東第一形勝を絶賞せらるゝ等、其名内外に洽ねし。
 爲に古來備後こしいへば何人も直に鞆津を稱せし盛況なりしが、一度山陽線の開通によ
 りて交通の要路福山及尾道に移りしより以來昔日の觀更になく、仍つて名勝の世に埋れん
 こころを慮る切なりしが、近年史蹟名勝地の指定せらるゝや吾が仙醉島は日本三景の一たる

序

<p> 特價一冊七圓 小冊料二十六圓 先會出版部發行 </p>	<p> 天賜 沼名郡誌 </p>	<p> 備南之名勝 備南之名勝 </p>	<p> 田島村誌 田島村誌 </p>	<p> 備南之名勝 備南之名勝 </p>
<p> 先會出版部發行 部出版會委先所行發 </p>	<p> 沼名郡誌 沼名郡誌 </p>	<p> 備南之名勝 備南之名勝 </p>	<p> 田島村誌 田島村誌 </p>	<p> 備南之名勝 備南之名勝 </p>

嚴島及帝釋と共に並び稱せられ、是に仍つて探勝の十日に多きを加へ、従つて遊覽者の迎接を以て町是の一とすに至り、或は新聞紙上に或は繪葉書の發行によりて風光を普く社會に紹介せんとするも、未だ汎く名勝を探り舊蹟の沿革を明にせる好個の著無きを遺憾とするここ久しかりしが、今回先憂會によりて名勝輛津と阿伏兔の發行を見恰も渴を醫するの思あり。而も著者は曩に沼隈郡誌編纂の業を完成せられたる最も造詣深き士にして、編次の法頗る宜しきを得、内容豊富、體裁整美、加ふるに趣味津々として雅客が絶好の同伴たるを喜ぶと俱に、之に依りて廣く景勝を世に紹介する有力なる先驅たるを信じ、敢て湖江に推奨す。一言以て序とす。

大正十三年七月

沼名前神社宮司 金原利道

緒言

往年中川八郎氏満谷國四郎氏等の洋畫家によつて、輛をうつした繪が文展を飾つてから繪の街としての聲價が俄に高くなつて、爾來畫家連の足をひく者が多くなつた。

紺碧に澄んだ水の上に、仙醉・辨天・皇后等の島々が浮んで、遠く渺茫たる燧洋の碧潮を望むあたり、俗鴈は自ら洗ひ流され、眞に水郷！といひたくなる。それに海水浴場はあるし、銷夏の好適地として、夏になれば來り遊ぶ者が非常に多い。

さうした人々に、手ごろの案内記を提供し更に、輛が詩の街であり、歴史の港であるここを紹介したいのは、かねてからの念願であつた。

しかし、もごより片々たる小冊子で、その概観すらもなし得ないで、單に項目を羅列したに過ぎないのは遺憾である。

もし、この小冊子が機縁となつて、更に詳細を知りたいといふ熱心なお方は、先憂會が發行した備南の名勝及沼隈郡誌を見ていただきたい。

大正十三年七月

先憂會同人

江戸關南の各郷に遊歴相見して、才を述べ、

よし、この小冊子を對遊したる、夏に編輯の時、心なすむ、先憂會の編輯は、

江戸のあまごより才を述べ、その遊歴するまじし得たり、單に耳目を編成して、

江戸のあまごより才を述べ、その遊歴するまじし得たり、單に耳目を編成して、

江戸のあまごより才を述べ、その遊歴するまじし得たり、單に耳目を編成して、

江戸のあまごより才を述べ、その遊歴するまじし得たり、單に耳目を編成して、

江戸のあまごより才を述べ、その遊歴するまじし得たり、單に耳目を編成して、

江戸のあまごより才を述べ、その遊歴するまじし得たり、單に耳目を編成して、

江戸のあまごより才を述べ、その遊歴するまじし得たり、單に耳目を編成して、

江戸のあまごより才を述べ、その遊歴するまじし得たり、單に耳目を編成して、

辭言

備後 名所 鞆津と阿伏兔

附沼隈沿岸の名勝

先憂會編

一、遊覽地としての鞆

日東第一形勝

世界海上の一大公園にまで外人の讚美して居る瀬戸内海でも風景の粹を

あつめて居るのは、鞆である。深緑の山を負ふて、前には紺碧の潮水をたゞへ、その上に、仙

醉・辨天・皇后・玉津・津輕・躑躅の島々を浮べ、いはふやうなき情趣をみなぎらして居る。

舊幕時代、韓使李邦彦が對潮樓に於て此の地の風光を賞し「日東第一形勝」の六字を大書したのも敢て過褒ではあるまい。

安國寺

〔安國寺〕 鞍驛から四町のころにある。足利尊氏直義が全國に安國寺を建てた其一つである。曆應二年法燈圓明國師の法孫である愚谷和尚が開創したもので、法燈を推して開山と崇んで居る。

一時地方宗教界の權威を握り、末寺も多く寺領や境内も非常に廣かつたが、次第に衰頽した。天正年間傑僧惠瓊が毛利輝元を大檀越として再興し、釋迦堂を建立し、法燈再び榮へたけれど、星移り年變るにつれ次第に衰へて昔日の面影なく末寺も離れ、檀家はなし無住勝になつてゐたのが、去る大正九年十二月四日、雨宿りの乞食が火を失したため、可惜由緒ある本堂も遂に焼失した。

釋迦堂にかけてある「大寶雄殿」の四字額は、黄蘗山五代繼席高泉の書である。



安國寺の釋迦堂

毛利輝元が曾てこの寺へ詣でた時、國侍三十六人に命じて一株宛の松を植ゑさせて永壽萬年の契ひした。現存してゐる二株の偃蹇たる老松は即ち當時のものである。

大蘇鐵と紅梅の老木とは、傑僧惠瓊の遺愛のものである。

沼名前神社

延喜式内の古社で、明治四年國幣小社に列す。祭神は綿津見尊で、相殿に素

蓋鳴尊を祀る。元來、綿津見尊は渡守神社、即ち式内の沼名前神社に祀り、素蓋鳴尊は、祇園宮に祀り、別々の神廟であつたが、明治九年五月、官命によつて、綿津見尊を祇園の本殿に遷坐し、素蓋鳴尊を相殿に祀り、爾來祇園の社號を廢して、沼名前神社と稱することとし、渡守の舊社は、そのまゝ境内に存して攝社とした。

祇園宮

人皇第十代崇神天皇の御代、疫癘が流行したので、天皇は素蓋鳴尊の御宣言を思ひ

浮べられ、直ちに勅使を派して當社に祈願せられた。ところが疫癘は忽ち終熄したので、西道將軍吉備津彦命をして代參せしめられ、疫隅の國社といふ尊名を奉られた。爾來神驗いや高く天平七年には、吉備眞備が、之を播磨の廣峰ひろみねに勸請して牛頭天王ごづと稱し、貞觀十八年には佛者

の手によつて山城の八坂に勸請し、専ら祇園と稱するやうになつた。爾來朝廷の崇敬あつく二十二社に列せられ、履行幸啓があるやうになつたから、これ迄素盞鳴尊を祀つて居つた神社は之に倣ふて祇園と稱するやうになつた。

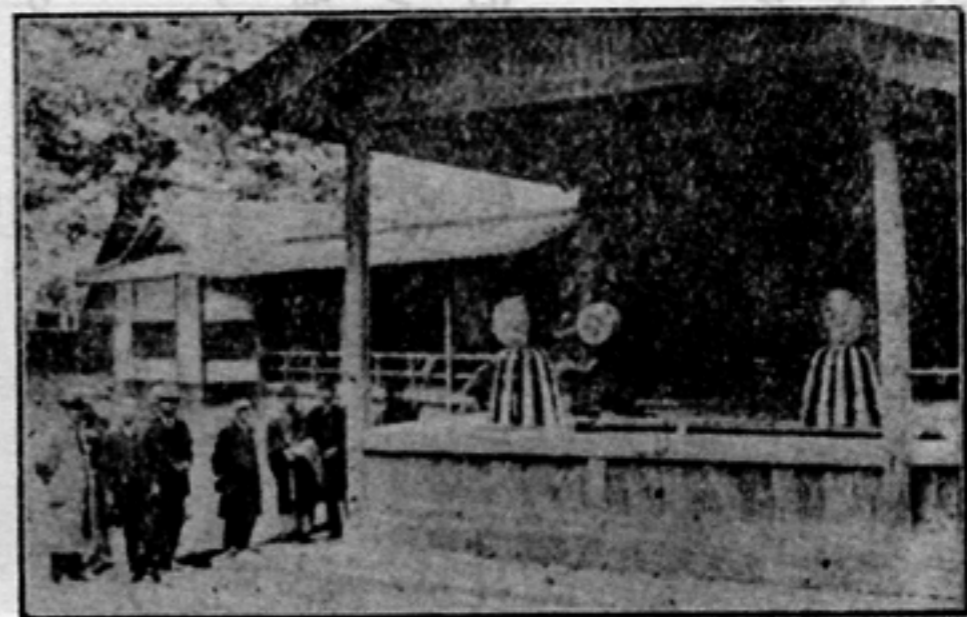
福山藩主水野家・阿部家等の尊崇も一方ならぬものがあつた。

伏見能舞臺、水野勝成が家康から伏見城中にあつたのを拜領して建てたものである。

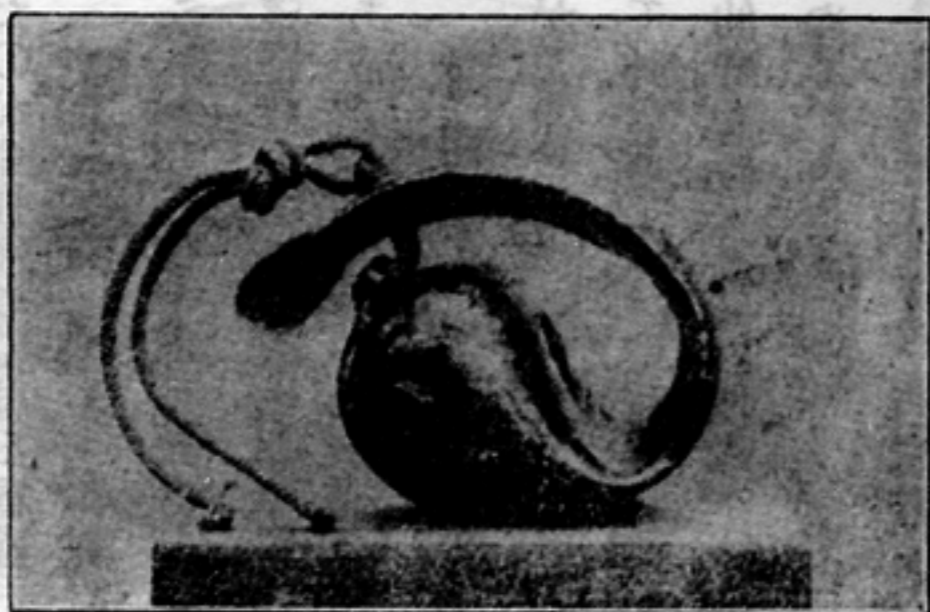
翁の面 翁面と千歳面は當社寶物の一である。

神輿 神功皇后三韓征伐を終へ凱旋せられる時報賽せられたものである。但し實物は焼失し今のは模造であるらしい

祭禮 祇園市は陰曆六月四日の御手火祭から二十四日迄であるが、十四日が大祭で遠方から



能舞臺



神 輿 輛

の詣人が非常に多い。節分の夜は劍替祭が行はれる。

社務所 磴道を登り詰めた、右手にある。宮司、禰宜、主

典等の職員が毎日神明に奉仕して居る。(電話五〇番)

渡守神社 もわたすみだ渡札の辻つじいふ坂に鎮坐してあつたのが慶

長四年焼失したので福島正則あしむねが後地うしろなる麻の谷に祇園社と並べて再興し、水野家時代に今の所に遷したのである。

祭禮 陰曆八月十一日から十三日まで、七町のもものが順番

に神輿の渡御を擔當して奉仕し、且つその當番の町内各戸に種々の飾物を造り、多くの軒燈をつり、手踊や二輪加等もあつて非常に賑ふ。

小松寺 臨濟宗で、本尊は觀世音菩薩、安元元年春、小

松内府重盛が嚴島詣での途すがら、此浦に船を寄せた時、一字を建立して自作護身の阿彌陀佛

を安置したに創る。去るに臨み、自ら寺庭に記念の松を植ゑたのが今日残つて居る重盛手植の松である。

醫王寺 眞言宗、本尊は樂師如來、天長三年空海の創建と傳へて居る。境内高燥にして燧洋を一眸のうちに收め、眺望絶佳である。福山藩の儒者門田重憐の撰した醫王寺十勝がある。

對潮樓 福禪寺にある。元祿年間の建築で、海山の絶勝がこの一樓にあつまるといつても過言ではない。樓上に坐して眸を放てば、燧洋の碧潮を距て、遠く讚豫の連峯を望み仙醉・辨天・皇后の島々は眼前に展開されて、眞に畫も及ばぬ感がある。



重盛手植松

舊幕時代には、西國諸侯の參勤する者や、文人墨客の漫遊する者が、必ず一度輓に寄り、此

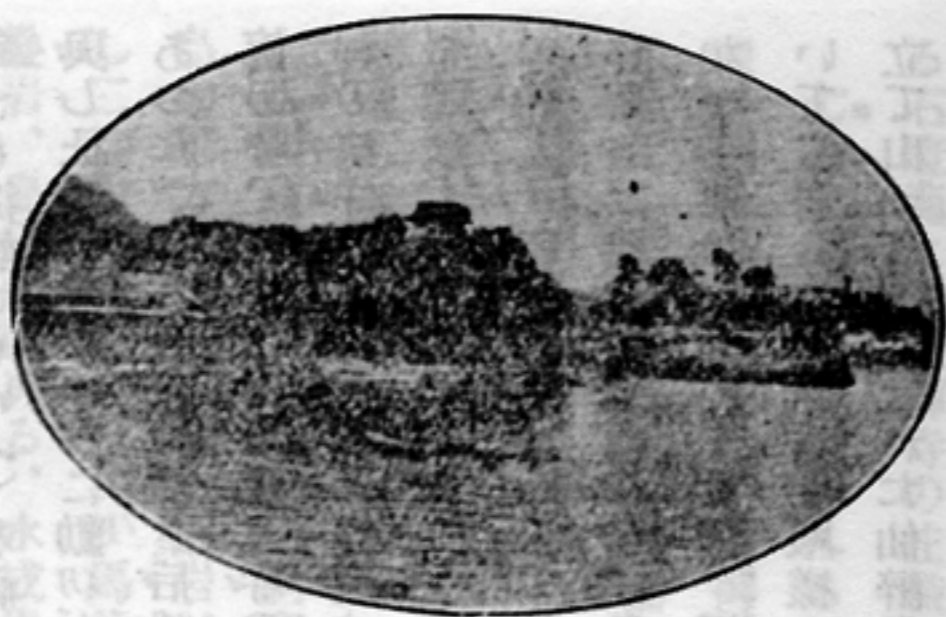
樓に登つて吟唱し相樂んだものである。

舊幕時代、朝鮮信使の宿館に充てられてから、韓人の間に喧傳され、使節の來朝する毎に、此樓に宿つて、絶美の風光に接するのを無上の幸福とした。

日東第一形勝 六代將軍家宣が、將軍職を繼いだ慶びを申し上げる爲め、正徳元年九月、韓使八人福禪寺に館した時、李邦彦が大毫を揮ふて「日東第一形勝」を書いた額が今に傳つてゐる。

對潮樓 九代將軍家重襲封の叙慶に入朝した韓使洪景海が對潮樓の三字を書いて楣間に掲げしめたものも現に残つて居る。

淀姫神社 後地大明神の山にある。虚空津媛命（玉妃姫）



淀姫神社

命も淀媛こもいふを祀る。姫は神功皇后の御妹君にましまし、常に左右に侍して機密に參與し征韓の役には特に勳功があつた。當社は、神功皇后凱旋の時、淀姫命を以て渡守の神の祭守こされたのに縁起す祭禮は七月七日。

仙醉島

「靱の向ひの仙醉島は、地から生れたか浮島か。」「地から生れもせぬ、浮いても居らぬ、あれは殿様お立て山」こうたはれた仙醉島は、元和の昔、水野勝成が封



仙醉島より皇后島を望む

を福山にうけた時、お立て山こして厚く保護を如へた。その後。水野家除封の際、奸惡の徒がひそかに濫伐したけれど、松平總州公が福山藩主こなるに及び、此等の徒を重罪にたゞし、後阿部家を経て明治になつた。

現に縣の公園こなつてゐるが、先年彌山に通ずる道路を設けて登山に便し、頂上に四

阿を建て、雜木を伐りすかして眺望に便し、常設の渡船を備へてゐる。島の各所に點在して居る石燈籠は、福禪寺の住職であつた佐竹心塔氏の斡旋によつて建てたものである。

七浦七胡 石碑の傳へるところによれば、市杵島媛命が初め此島に天降り給ふたけれど、土地が狭いので鎮り給ふに御不便だつたため安藝の嚴島へお移りになつたのだこ。

又云ふ。平清盛が、嚴島から社殿をこの島に引かうこ思つたけれど果さなかつた。故に仙醉に七浦七胡があるのだこ。

七浦こは、明神の前・大松浦・小垣浦・田の浦・彦浦・經ヶ崎・深山尻である。七胡は今は見當らない。

八洞窟 多島到る處に洞窟が出来て、神斧の言を示して居る。八洞窟こは、(1)高棧敷洞窟、島の東方にある、(2)五色岩、東部大松浦の北側にある、(3)大牛の鼻洞窟、皇后島の西南角に位置し二つの洞口がある、(4)馬背眼鏡岩、島の西部にある、百貫島こ相對し眼鏡のやうである。(5)疊岩、島の南にある、水成岩の脉をあらはし、疊のやうである。(6)犬首岩、東部にあつて犬の

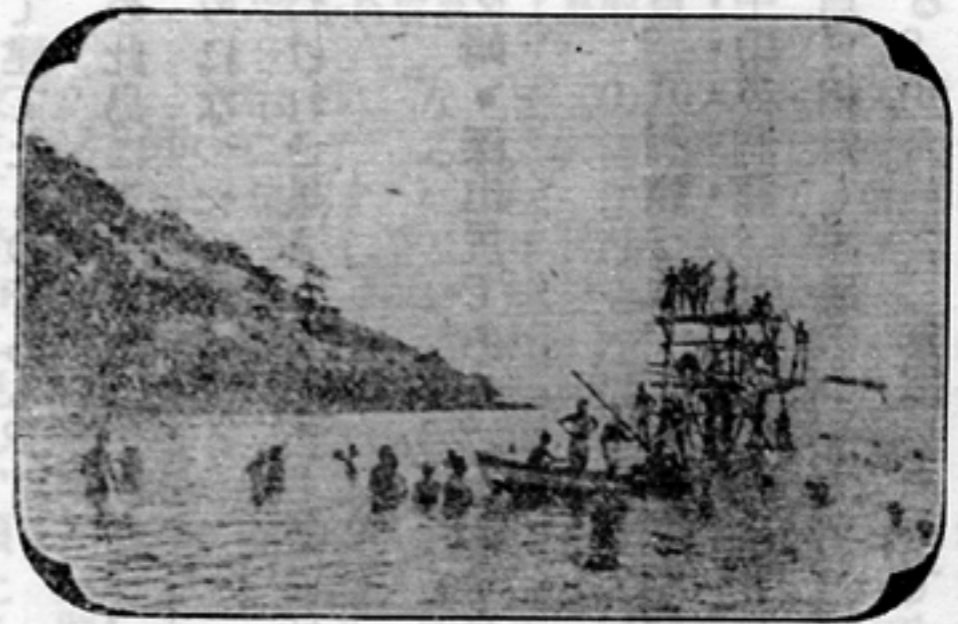
首のやうである。(7)獅子眼洞窟、島の東部大松浦にあり、獅子の眼のやうな形をして居る。(8)蝙蝠洞窟、島の南部、彦浦の東側にある。

●運動場 ●グラウンドの設備が出来野球、庭球、其他の競技場に適してゐる。

●食堂 ●旅館の外に仙醉食堂の設けあり、清新なる和洋料理を安價に供給して居る。

●海水浴場 ●田の浦にある。白砂連り、波は靜かで脱衣場等の設備も出来て海水浴には非常によい。其外彦浦にも浴場がある。海水清澄、瀟洒たる別天地である。

●貸家●貸間 ●避暑の爲め來島する者の爲に貸家を建て六疊乃至八疊間二十六室を設け自由に自炊するここが出来る様にして居る。



仙醉島の海水浴場



辨天島の瀬戸

●辨天島 ●百貫島ともいふ。手でこねて造つたやうな島で仙醉島を背景にし、島上に辨財天の祠がある。故に今は一般に辨天島と呼んでゐる。百貫島に命名されたについては、憐れな物語がある。昔近江の國の正道といふ武士が、嚴島へ詣でた歸りにこの島へ寄つた時、過つて傳家の寶刀を海中へ落した。海は深いし、瀬は早いし、さうすることも出来ない。そこで浦人呼んで事の由を語り百貫の金をかけてさがさせやうとした。けれどこの邊の海には悪魚がをつて度々人の命をころこて誰一人これを請合ふものがない。正道氣をいらち「鞆の地は昔から音に聞けた蟹の里であるのに、一人の人も居らぬか」と罵つた。そこで一人の男が飛び出して「それでは處の恥ぢである、自分が一命を郷土の爲めに捧げやう」といつて、無智敦朴の一漁夫

が、他國の人に笑はれるのを愧ぢて、さんぶこばかり海中に飛びこみ漸く太刀は拾ひ上げたけれど、此時已に悪魚が足をかみ切つてゐたために、漸く船に上るこ共に絶命した。

正道はこの様子を目撃して憐愍の情やるばかりなく、彼の漁夫に與へるこを約した百貫の金で高さ一丈三尺ある十一重の石塔を建て、供物や施僧も懇に營み、郎黨一人を残して四十九日の追善まで行はしたこの事である。悪魚は鱻であらう。

この石塔に隣つて高さ一丈、幅二尺の碑がある。これは明の遊撃將軍として知られてゐる支那浙江の人沈惟敬の建てたものである。

惟敬は太閤征韓の役に、小西行長と平壤に會して和議を講じた人である。その後封冊副使として入朝し、歸途百貫島に遊び、島名の因つて來れる憐れな物語りを聞き低徊去るに忍



海人の墓

びず、この碑を建てたこのことである。碑文は抹滅して讀めない。

玉津島

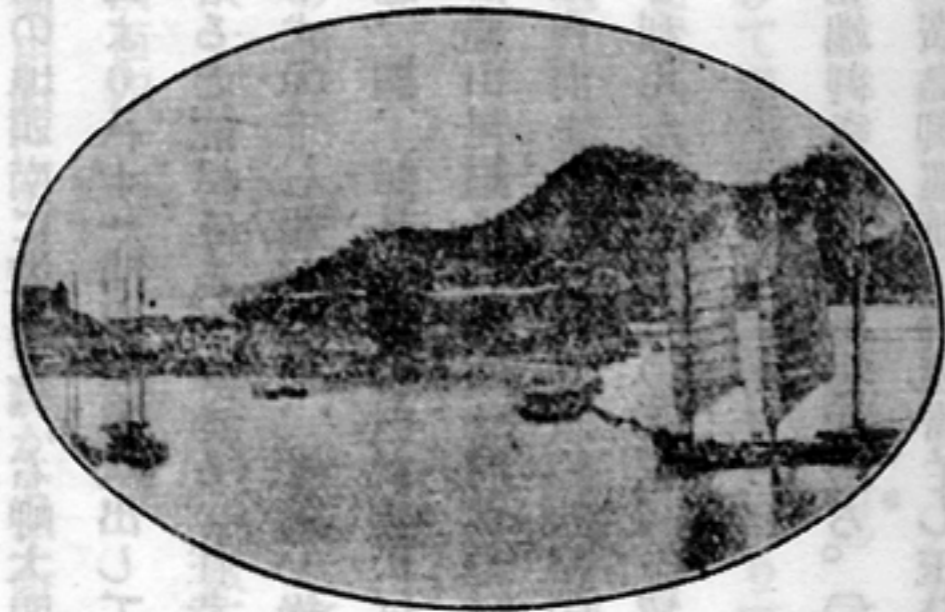
玉島ともいふ。靱港口に横はる小島である。

島上に玉津島明神を祀つて居る。祭神は神功皇后、例祭は五月一日、煙花等を打ち上げて非常に賑はふ。

皇后島

百貫島の東にある神功皇后の御舟をつながれたといふのでこの名がある。

島上の碑は、靱最初の奉行荻野重富の妻の永へに眠つて居



る奥城である。

靱港

海水彎曲するここの如く、岬角抱擁する港津口を護るもの之が靱港の概観である。山を負ひ水に枕み、港神工鬼斧、自然の泉水を形成し太古より良津として幾多の事蹟を印して居る。

港は東西六町十間、南北六町二十間にして、港口東南に

開き、左岬要害の鼻より五十間の埠頭南に突出し、右岬大明神より二十間、平の濱より三十間の埠頭東に突出し、港口玉津島より八十一間の埠頭横出して波浪を防いで居る。水深僅に二尋干満の差甚しきを以て大船を容るる能はざる憾がある。往昔瀬戸内海航行の船舶は必ず茲に寄港したので、港内には常に日本式の千石船が満ち、米穀、繰綿、肥料及日向茶、古手物、清酒保命酒、酢、錨、疊表、七島蒔、網、船具等の取引が盛に行はれて居つた。山陽鐵道開通後交通の要衝が福山尾道に移り、一時沈衰に陥つたが大正二年輕便鐵道開通して陸上の交通備はり、海上には内海上下の汽船、讚備連絡の汽船、發動汽船等往來して海陸運輸の便開け、近時天然の景勝を利用して、内外の遊覽客を招致する設備成り、面目を一新するも近き將來であらう。

市街 輕便鐵道は町の北端御幸町に停車場がある。「御幸町」は明治三十一年今の聖上陛下の皇太子に御座せし時、廣島御巡航の歸途寄泊し玉ひ此の邊りを御徜徉遊ばされしを以て大正二年修して命名す、農家多し。「原町」漁家多し。「鍛冶町」慶長の末町奉行鍛冶、釘

屋の類を此の地に移す。靱名産の錨や釘類や其他の鐵工品は多く此の町で生産されて居る。

〔祇園町〕靱祇園社への參詣道に沿ふた町家である。「石井町」天正三年石井石見守清信兄弟義昭將軍に扈從し來たり矯居せし跡なり云ふ。「關町」正平四年足利直冬中國探題として靱に居城せし時關門を此地に設けて通行の人を誰何せしより町名こなる。「西町」慶長年中大崎立藩市區改正の時、治所の西に當れるより名く商家最も多し。「道越町」滿越である往昔大可島の通路、祖傳ひの細き繩手道にて滿潮時には往來の人も尻からけして渡つた云ふ。今は町家軒を並べ遊女町さへ榮えて居る。「江之浦町」靱の發祥地である。「焚場」江浦町の内で舟の焚場があつた所。「平」元平村にして平一丁目より三丁目に至る、一筋町を爲し、漁家多く町はづれには農家多し。全町の面積〇・二九方里、東西八町二十間南北一里四町、宅地面積七萬九百二十四坪。田二町。畑八十町。山林八十町餘。戸數二千三十戸。人口男五千六十一人、女五千三百八十人、合計一萬四百四十一人。(大正十二年末)

官公署 〔靱町役場〕後地田中にある。靱驛から十町。電話二二。〔松永警察署靱分署〕

西町にある。電話二。〔鞆郵便局〕 西町にある。電話一〇〇。〔福山區裁判所鞆出張所〕 後地田中にある、町役場の裏手に當る。〔廣島縣水産試験場鞆支場〕 平一丁目にある。

學校

〔町立鞆女學校〕 後地田中にある町役場と並んで居る。修學年限本科二年、補習科別科各一年である。〔鞆尋常高等小學校〕 後地草谷にある。學級數二八兒童一六六二人、職員三〇。〔大正十一年〕電話四二二。〔鞆幼稚園〕 後地大寺前にあり、鞆婦人會の經營である。

銀行會社

〔鞆銀行〕 西町電話一〇。〔桑田銀行鞆支店〕 關町電話四〇。〔鞆輕便鐵道株式會社〕 御幸町電話二〇。〔株式會社鞆保命酒屋〕 江浦町電話二五。〔鞆錨釘合名會社〕 鍛冶町電話一九。〔關西漁網船具合資會社〕 道越町電話一二。〔合名會社鞆金物製作所〕 御幸町電話五五。〔鞆蠶種合名會社〕 西町電話七五。〔鞆材木合名會社〕 西町電話二三。〔鞆製網合資會社〕 關町電話三〇。〔岡本保命酒合名會社〕 江浦町電話一一。〔合名會社産業商會〕 御幸町電話六八。〔廣島電氣株式會社鞆出張所〕 御幸町電話一六。〔山岡銀行〕 西町。

寺院

〔臨濟宗〕 安國寺、小松寺、靜觀寺、慈德院、勝音寺、禪照寺、正法寺。〔眞言宗〕 福禪寺、地藏院、醫王寺、圓福寺、地福院、増福寺、寶嚴寺、常喜院、玉泉寺。〔眞宗〕 明圓寺、南禪坊、善行寺。〔日蓮宗〕 妙蓮寺、顯政寺、法宣寺。〔淨土宗〕 阿彌陀寺、淨泉寺。〔時宗〕 本願寺。

交通

鞆輕便鐵道 明治四十四年起工し、大正二年十一月開通、列車發着回数 一日七回往復。

福山……野上……稻荷……妙見……水呑……葛城……田尻……鞆

大阪商船 大阪商船會社の大阪下關間を航路として居る汽船が鞆へ寄港する。

尼崎汽船 尼崎汽船會社の内海航路の汽船が鞆へ寄港する。

東豫丸汽船 尾道港を基點とし多度津との間を連絡してゐる鐵道省の連絡船東豫丸が鞆へ寄港する。

安正丸 鞆を基點として毎日尾道笠岡との間を航海して居る安正丸は左の航路をこり鞆へ寄港する。

笠岡……鞆……阿伏兔……岩船……内浦……敷名……大越……常石……尾道。
千鳥丸 鞆町を基點として毎日尾道間を往復してゐる。

鞆……阿伏兔……岩船……敷名……大越……常石……尾道。

旅館及料亭

對山館 (道越町電話四五番) 裏は海に臨んでゐて辨天、仙醉等の島を眺められモーターボートの設備もある。こきは旅館 (西町坂電話三二番)。星の浦館 (平)。大長 (關町)。佐渡利旅館 (石井町)。丑田旅館 (同上)。向井旅館 (關町)。三島屋旅館 (御幸町)。橘旅館 (道越町)。二見館 (同上)。もちや旅館 (御幸町)。吸霞亭 (長電一〇九番)。仙醉亭。彦浦館。田浦館。仙醉貸間經營會。町營食堂。(共に仙醉島にある)。其他の旅館にもモーターボートを備へて居る。

遊園

〔仙醉島公園〕 關の濱から僅に十分間で渡れる、渡船料は片道三錢。旅館や料理屋の設備もあれば、町營の簡易食堂もある。運動場もあり、種々運動器具も備へてある。近頃貸家が建つて貸間も出來て居る、夏季は海水浴場も開設され自由に遊ぶこゝが出来る、避暑の好適地。(別項仙醉島参照)

島めぐり

和船で三時間モーターボートなら一時間。關の渡船場から船へ乗る。辨天の瀬戸を横ぎつて仙醉島の西角〔赤樺岩〕から見始めて船を南へ廻はす。〔眼鏡岩〕大正十二年九月關東地方大震災の當時鼻柱が毀れた。皇后島の〔大牛の鼻〕〔小牛の鼻〕を廻はつて〔宿彌窟〕へ引き返へす。其の對岸〔田の浦〕には運動場や海水浴場がある。〔赤岩〕は水成岩の脉をあらはして居る、〔猿渡り〕〔上下島〕は干潮の時は徒渉



岬 園 祇

される、此の島を過ぎるに「彦浦」に到る。海水浴場がある、「蝙蝠の洞窟」を見て、「烏帽子岩」



望遠の園公山城古

を過ぎ「小松浦」に入る。「獅子の目洞窟」を眺めながら、大松浦に船が進むと右舷に「躑躅島」がある、干潮狩の名所である。此の浦の北側に「五色岩」がある。「犬首岩」や「高棧敷洞窟」を眺めつゝ、船は北へ廻る「象の鼻」や「材木岩」、「象の足」を過ぎて「祇園崎」に進む。左舷は大浦で明神の松が見へる、祇園崎から船首を西に向けて「三山尻浦」に入る。夫婦松が見へる。「小三山尻浦」から「夕日岬」に出ると辨天島の夕照が天下一品である。「小柿浦」から上陸して吸霞亭や仙醉亭等の料亭で休憩し、「御前山」へ登ると辨天島や鞆の市街が一眸の裡に集まる、「彌山」頂上までは十数町登山道も出来てゐる。

「古城山公園」町の中央に在る一小丘である。眺矚豁如。

夏季納涼の適地である。

〔要害〕 港の東端にある小丘である、林氏の別荘、圓福寺、芭蕉の句塚、森下仁丹の墓所等がある、風光明媚。

〔阿伏兔観音〕 鞆の郊外千年村能登原にある、行程一里、徒歩で一時間なら充分である、平を通ふて新道を能登原へ廻るよりも室濱に出で山道を阿伏兔へ出る方が興味がある、モーターボートなら十四五分、和船なら三四十分もあればよい。松永からは自動車の便があり、尾道からは二三回發動汽船が寄港する。(別項阿伏兔参照)

潮干狩

到る處の沿岸可ならざるはない。就中仙醉島の小柿浦及大浦、地續きでは江の浦、白茅、皿山等最もよく、陽春三四月の交には最も盛んである。

鯛網

陰曆三月の節句頃から六月の終り頃迄鞆・横島・田島等の沖合で鯛網を曳く。これは備南名物の一で、小舟をやこふて鯛網見物に出かけるものが多い。春陽清和の一日、幾群の鯛網船で、赤銅色をした筋骨逞しい漁夫たちが「ハトリハヨイショ」の掛聲勇ましく、一網で數

千尾の銀鱈金鱈をひき上げる壯觀は、他で見られぬ圖である。今年から靱津保勝會では五月から六月初旬にかけ遊覽船を仕立て、鯛網見物に便宜を與へて居る。

海水浴場 「田の浦」・「彦浦」共に仙醉島にある、「星の浦」字平。「檜岩」鍛冶町の裏海岸。等が主なるものである。

娛樂機關

靱劇場 靱祇園社下に在る、二階建。觀覽者千人を容るるに足る。
喜樂席 石井町にある、平家建二百人を容るるに足る。
撞球俱樂部 關町にある。

遊女町 靱の遊女は、遠く神功皇后時代に端を發し、奈良朝、平安朝時代を通じて、源平時代に入りて遂に眞正の遊君となり、爾來北條氏足利氏を経て戰國末にかけて繁榮したものである。始めは江の浦にあつたのを、慶長五年今の道越町に移し有磯町ありそ名附けた。水野勝成が福山の城主となつてからは、毎年百俵宛を與へて保護し、或時には奈良屋へ行つて金泥の扇

子一對、猩々毛の拂子一個を下賜したことがある。かくて遊女町は非常に榮ゐて、幕末には籠藤一軒にでも六十名の遊女をかゝへてゐた事がある。

現今は道越町に僅に餘濫を保つてゐる。藝妓十名内外、娼妓三十名内外居る。

年中行事

劔替祭 (二月四日)節分の夜沼名前神社に於て行はる、祭典にて老若男女入り亂れて劔替を爲す珍しい神事である。近郷より多數の參詣者がある。

御弓神事 (舊正月六、七日)八幡神社(沼名前神社攝社)の祭典にて神功皇后御凱旋の古式に依る云ふ。

阿伏兔縁日 (舊正月十八日)

辨天煙火祭 (舊四月十四日)辨天島辨財天の祭禮にて島上及び海上より晝夜煙火を打ち揚げ賑を呈す。

沼名前神社例祭 (五月二日) 奉幣使參向幣帛を供進する。

玉津島祭 (舊五月五日) 端午祭。

沼名前神社夏祭 (舊六月四日より二十日間) 四日〔御手火神事〕がある、大小數百の炬火一時に點ぜられ社庭は白晝の如く壯觀無比である、七日神輿要害の御旅所へ渡御。十四日大祭神輿還御、十八日神能奉獻せられ此の間は參詣者最も多く三備は勿論美作四國九州地方よりも參詣し雜鬧を極める。

淀姫祭 (舊七月七日) 七夕祭とも云ふ、淀姫神社の祭典である。

四萬八千日 (舊七月九日) 阿伏兔觀音の緣日夜間大に賑ふ。

渡守神社祭 (舊八月十一日より十三日) 神輿渡御、作り物等を爲し町内殷賑を極む。

ふいご祭 (舊十一月七日) 小鳥神社の祭典にて金神祭かながみと云ふ。

二、歴史上より見たる鞆

素尊の遺跡 出雲國簸ノ川上に於て大蛇を斬り給ひ

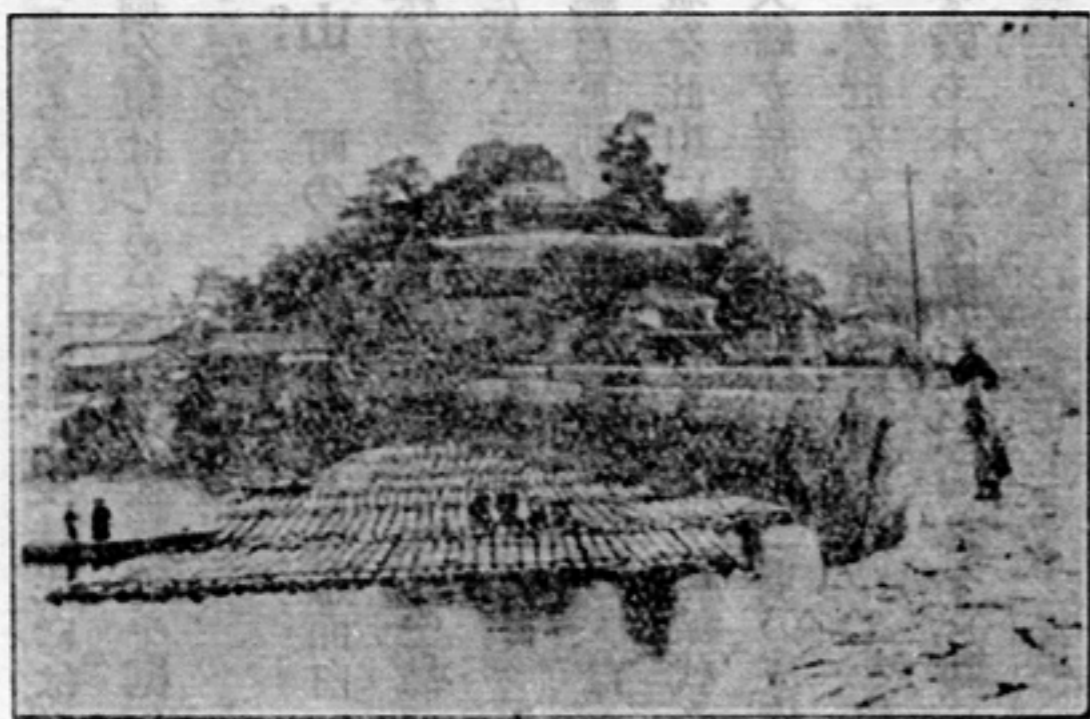
し素盞鳴尊は、備後に下られ、さばねなす荒ぶる神々を平けられつゝ、芦田川に沿ふて穴の海に出で、海岸を傳ふて沼隈に入り、疫隅ねすみの浦即鞆から舟に乗つて南海に出でまし、再び還り來つて國土を經營せられ、後出雲に入らせられた。

神功皇后御寄泊 仲哀天皇と共に熊襲平定のため

筑紫に航せられる時、鞆の浦に於て海神を祀られ、渡海の平安を祈らせられた。

三韓征伐を終へて凱旋せられる時は、武器鞆を奉賽せられた。

要害 もこ大可島といつて、南北朝時代の古戰場



要害

であるが、その後村上一族が之に據つて海上權を握つたところもある。異國船出沒時代には、阿部正福が江戸から遠眼鏡を送り、之を据付けて黒船の通過を窺はしめた。その後巨砲を据ゑて嚴戒したところもある。明治になつてからは、林氏の別荘となつた。



塚首の助之鹿中山

んこした時家康が一國一城の命を布いたために、天守閣を毀ち本丸を廢し、二の丸を官邸とした。當時の石垣が一部現存して居る。

城山 町の中央にある。枝態面白い數

株の老松があつて眺望がよい。もこ中島といつてゐたが、近頃は古城山といふ。關ヶ原の戦後、福島正則が藝備を領することゝなつた時、枝城を此山に築くことゝし、鞆城代をしてゐた大崎玄蕃が命を受けて、三重の天守閣を築き、宏壯な大手櫓を建て、將に工を終ら

山中鹿之助の首塚 靜觀寺前の往來側にある。黄色粗面の自然石を立て、ある。鹿之助の胴体を埋めた墓は、備中川上郡落合村にある。

さしやき橋 靜觀寺前の石橋に其名をこゞめて居る。昔はこの邊まで海水が灣入してゐて長い橋がかゝり、橋の袂に遊女なごが棲んでゐて、往きかふ人の袖をこらへてさゝやいてゐたところである。

一説には、應神天皇の十六年に、百濟から博士王仁が經典を捧げて來た時に、鞆の驛館に江の浦といふ官妓が居つたのが、武内臣和多利といふ接待の役人ゝ相思の仲となり、毎夜橋上に於て喃々の語を交へてゐたところ、好事魔多く、二人は遂に曠職の罪にこはれた。故に橋の名が起つたのだこ。

蔀山 能登原坂を負ひ、明神山を見下す丘陵で、今は全部山畠となつてゐて、頂に水難救護所が設けられてゐる。元來蔀山は備後名所として名高いのであるが、同名の地が三ヶ所あるのはつきり定め難い。鞆の蔀山は、人見山の訛で、人見番所であつた所であらうかこの説

もある。

芭蕉の句塚 要害の上にある。青色の自然石に左の俳句及銘を勒してゐる。

うたがうな潮のはなもうらの伴

蕉翁爲人 滑稽絶倫 扈言温古 鼓吹知新

千里負擔 諸州師賓 同志繼緒 花月此裡

安永六年酉春三月

三、鞆の物産

鐵工品・錨 鞆鍛冶の起りは刀工である。慶長元和の偃武以降刀匠が振はぬやうになつたため、自然に時代に適切な錨・釘・鍬・鎌等の製作に轉業するやうになつた。慶長の末に、鞆町奉行岡本傳之丞が、鍛冶職を一つ町に集めてから今の鍛冶町が出来た。鎖國の禁が解けてか



塚句の蕉芭

らは、諸藩が競ふて大船を造るやうになつたので、錨の需要が増して斯業が盛んになり、維新後錨鞆の名が高まるに共に益々注文が多くなり、販路の拡大と共に、海外へも取引されるやうになつた。随つて従來の鐵槌鍛冶は機械鍛冶になり、非常な盛況を呈するやうになつた。

保命酒

約千七百年の昔、神功皇后時代に始る。保命酒の起源について次のやうな傳説

がある。當時吉備南海邊に、土豪、來熊國造の祖來破屋子彦男いふものがあつた。一種の銘酒をつくつたのを、たましく神功皇后が、筑紫へ下向の途次、この浦へ寄泊されたので献上した。翌春凱旋の時再び奉獻したところ、三降酒命名され、彦男に大酒主の姓を賜はつた。

三降酒は、俗にトモノリ酒もいつてゐるが、保命延壽の効があるこのことで、何時の頃からか保命酒と呼ぶやうになつた。

降つて徳川時代になつて、延寶元年に幕府が酒造株の制度を設けた。この時醸造權は生玉堂中村氏の手に入り、稀代の珍品として聲價高まり、家門が非常に榮ゐた。

中村氏の家傳によれば、萬治年間、大阪生國魂神社の側から鞆に移つて、保命酒を創めてつ

くつた。故に屋號を生玉堂といふのだこ、果して何れか。

保命酒は、地黄劑を主にし、外に芳香健胃の藥種十六味を調和して居るので、十六味地黄保命酒と稱し來つたものである。

舊幕時代は、國産として備後表と共に一種の官營となり、福山藩からは年々朝廷や幕府への献上品に用ひられ、江戸の藩邸では、藩吏が正服をつけて公賣し、大名や旗本等の贈答品として廣く賞用されたものである。尙月卿雲客詩人墨客等非常に之を珍重し、その容器の備前焼も亦鍾愛された。

現今販路が非常に廣く、海外へも盛んに輸出せられる。

竹輪 鞆の竹輪はその味が非常によいといふので賞美されてゐる。就中豆竹輪といつて

極小さいのがあるが、土産物等によろこばれる。

漁網地 往時は麻糸漁網地に限られてゐたが、晩近漁具漁法の改善の結果、價額低廉にして耐久力豊富なる綿糸漁網地の需要が多くなつたので、これが製造盛なり。

瀬戸内海沿岸及九州は素より、西は朝鮮、北は北海道に迄も販路を擴張し、年産額十五萬圓に及ぶ。

麻糸漁網地も曳網漁業用として需要があるので、やはり特産品としての面目を維持してゐる。
鞆酢 備前醬油に鞆の酢と謠はれ、讃岐伊豫より筑前筑後豊前豊後日向に亘つて販路廣く、近時大阪方面へも盛んに輸送せられる。

土産品 保命酒粕、祇園の花(魚製造物)、梅の香(梅汁製造)、祇園焼(各種陶器物)、蒲鉾、櫻めぶこ(魚製造)、鞆名所煎餅、梅味噌、碁石煎餅等がある。

四、名士の見たる鞆

鞆の一泊

巖谷小波

日東第一の形勝一輛はなる程好い所だ、五六年前、瀬戸内海の週遊船に乗って、此所、海から見た事はあるが、時間がなくて上陸しなかつたから、何んのことにはない、御馳走の香氣計り嗅がされて、指を咬へて通り過ぎた様なもの、それが今度縁があつて、此所に一日でも遊ぶ事の出来たのを、煙霞の神に感謝せざるを得ない。

時は四月二十六日、神戸を朝立つて急行車が福山に着いたのは正午であつた、此所からは輕便鐵道によれば、一時間たらずで輛へ行けるのだ。(中略)

やがて輕便鐵道なるものに乗せられた。大した橋もなければ、長いトンネルもなく、已にして右に高い茂山を仰ぎ、左に広い入江を眺め、さて前に大きな島山を見るに當つて、はや輛の町についた。



平の濱邊

但しその停車場は、町の尤も端にあるものでそれから俾に運ばれて、宿に定められた對山館に來るまでには、長い町をうねり小高い坂を一つ越えて、更に小路を入らねばならない。その間には、多く鍛冶屋の店を見、屢々保命酒の看板を見る、これは共に此所の名物なのだ。

對山館に云ふは、海に面した大きな料理屋兼旅館なるものだ、奥の露臺に出て見るに、前には辨天島があつて、これがまるで、この家の爲めの、庭であるもの、様に見ゆる、さて左の方を見るに、海につき出た懸崖の上に、まるで畫の様なお寺がある。此所が福禪寺なるもので對潮樓は其の方丈の事だ。

さて又右へ目を轉すれば皇后島、玉津島、遠くは洲輕島なすが、さながら形のよい盆石を、青疊の上に列べた様である。

あれこれ説明してくれる有志者に取まかれて、殆んぎ茶を飲む間も忘れてゐるに、やがて船の用意が出来たに云ふ。これは此所から海上一里、傳説的の名勝にして、寫真に各停車場の待合を飾つてゐる例の

阿伏兔観音へ参詣のためだ。

船は恰も對潮樓の下から出た。案内は桑田、岡本、原田の三氏、それに宿の女中こである。油の様な、江の面を、軽い船聲に送られながら夢の様にすべつて行く、……之をこの一時間程前まで、煤煙をあびながら揺られて居た、あの汽車の乗り心地に較べて見るこ、さながら窮屈な仕事着を脱いで、ゆらりこ浴衣に着かへた様だ。(中略)……………まづ對潮樓に登る。

此所は天曆年間、空也上人の開基こあつて、千年に近い古刹の一つだが、有名な對潮樓は、元祿年間に建てられたこ云ふ。

日本一の瀬戸内海の、瀬戸内海一番の靱の浦其の又浦一番の勝地を占めてゐるので、昔から



仙醉島御前山よ見たる天島及要害

此所に足を停めた。

誰わか歸りを忘れずに居られたらう。さればこそ正徳元年、朝鮮貢使の一行の、李邦彦こ云ふ學士が、爲に「日東第一形勝」こ書き残した其の額はまだ正面に掲げてある……………(中略)さて此所で仙醉島に渡つた。船で僅に十分許り。

吸霞亭こいふのがあつて、食ふべく、飲むべく將た宿るべく、最も好位置を占めて居る。一体この仙醉島こ云ふのは、周圍四十七町、峰は大小二つにそびへて、其の松柏の翠を積み、浦は出入六つにわかれて、何れも眞砂の白きを敷く。むかしある漁師、ある日この島に渡つて、仙人の醉臥を見つけてから、此の名があるこ傳へられ、又遠く海上から見る客が、仙人の醉臥に似て居るからこも云ふ。然し僕は私かに思ふ、仙醉は元こ泉水で、云はゞ庭の様な景こ云ふのだらう、これを何時頃かの風流人が、泉水の名を俗がつて普通で仙醉こ更字つたのではあるまいか。尤もかうした例は此所許りではない。

兎にも角にも此島は、離れて眺めるに宜しく又上つて遊ぶに宜しい現にその峰の頂上まで、

此頃は立派に道も開けて、女小供も樂に廻はれる云ふが、惜しいかな僕は夕方の汽車ではもう歸らねばならない。……

繪の街ごうての靛

洋畫家 吉田博



重要の平の濱を望む

靛の津の丁度亞刺比亞の町見たやうな狭い所を曲りくして對山館云ふ宿屋に入つた。此の宿は何だか旅行中で一番宜ささうな氣がした、夫れは部屋がよいこか、料理が安いこか云ふのではない、二階の眺望に來たら瀬戸内海第一だらう直ぐ目の下を帆を上げた船が通つて行く、其向ふに辨天島がある、其上には宮があつて丁度松島の五大堂のやうな景色だ其向ふに大小の松が冠さつて居る、仙醉島が見ゆる。日本三

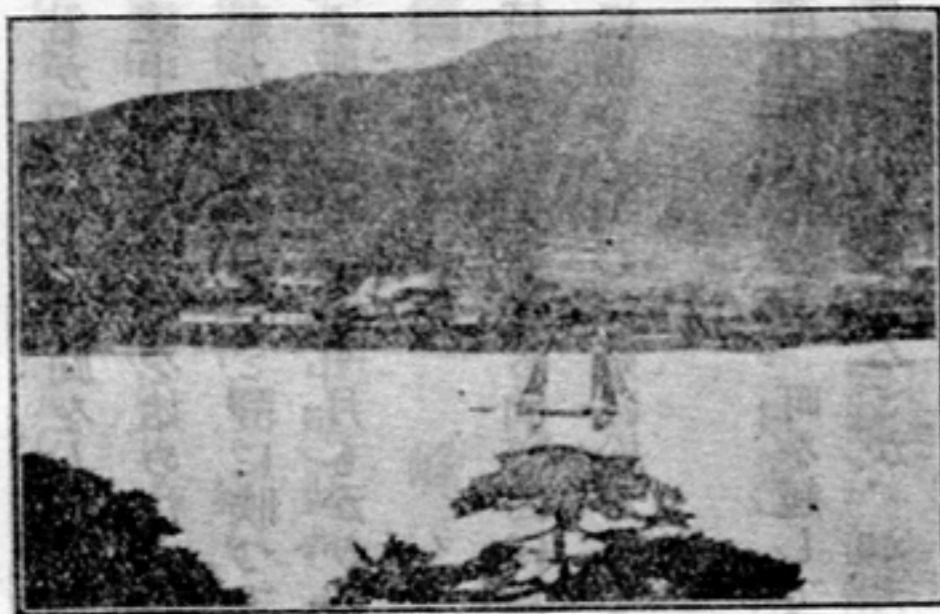
景等は無意味な撰擇であつた。此處でも已に三景以上の景色はある。

朝着いたのだから場所見旁々直ぐ寫生に出ることにした。

(中略) 一体此の靛の津云ふ所は昔は半島の出端で非常に繁昌して居たためか、家の屋根や壁の色が面白い、さうして道が狭い極古風に出來て居るので畫かきの目には至極都合の好い所が澤山ある。殊に月夜に來たらたまらない。

一日寫生をするこ中川君が腹を悪くして寢てしまつた、牧野君は無論寶物取調に極つて居る、それで吾々は第一に靛の津の壁に屋根を描き始めた、土地の人からは餘り平凡過るやうに思はれるのが態々東京から來た畫家が斯ういふのを描いて行く云ふことを不思議にして居たやうであつた。

中川君も其翌日は腹工合が好くなつて、寫生に出かけたが



仙醉島御前山より望む夕照

さうも雨天勝で困つた。こころが外の土地で出来ない事は岡部君が相變らず周旋をして何處の二階でもサツサミ上つて行けるやうにして呉れるのだ、そこで連中は二階寫生を始めた、靜かな鏡のやうな港に帆を揚げた風が澤山居て、そうして小さな小船がすうこ通るこ靜に映つて居る水を引切つて鳥が飛んだやうな船の形を付けて行く。さう云ふ所なきは確に一月もかかる位な大作をやるだけの價值があると思ふ。(中略)

鞆の津に行つてから四五日目に好い天氣の日があつて辨當を持つて辨天島から仙醉島に寫生に往つた。仙醉島は丁度小豆島の二子見たやうな所で黄色い土に曲りくした好い松があつて其松の色が特に其の時候には温い綠色をして居る。

高い所に登つて見るこ辨天島が眞下に見れて、其向ふに鞆の津の町が見ゆる、町を越して山が重なりく遠く連つて居る、景色の好い所は誰もさう思ふこ見れて公園にするこか、ホテルを立るこか云ふ計畫があるさうだ、何様適當な場所であるかよく公園だの何だののために景色を打壞はす場合が澤山あるから特に注意して置いて貰いたい。(中略)

一体日本の日本三景こか近江八景こか景色の好い所を選むであるが、名高い割合に一向詰らぬ所が多い。一つ瀬戸内海の十二景を私が撰んで見やう。

星ヶ城の展望(小豆島) 二子の朝晴(同) 談古嶺の天明(屋島) 音戸の夜雨(安藝) 仙醉島の松(鞆の津) 辨天島の月光(同) 阿賀廣の瀧(安藝) 高濱の雨(伊豫) 千光寺(尾道) 栗林公園(高松) 別府の高原 孤島の夕陽。(瀬戸内海寫生一週より)

阿伏兔と鞆津

徳富蘇峰

七月九日午前六時過ぎ、宮島有の浦より汽船利根川丸に乗りて、鞆に向ふ。(中略)此れより阿賀、竹原、忠海、糸崎、尾道を経て鞆に至る迄は、瀬戸内海中國筋の好風景にして宛も一幅の横軸を繡くが如く、左顧右眄、應接に遑あらず、但だ竹原以東は、山は兀山にして、土は赫色を帯び、巖石多からず、聊か割引を要するに似たり。然も其の景色の概して支那の長江筋に



髣髴たるあり。

特に阿伏兔の観音の如きに至りては、海峡の斷崖に磴道を鑿り、其上に觀音堂を安置す。如何にも支那流の潮にして、長江航路の大孤山、小孤山を聯想するを禁ずる能はざらしむ其進んで鞆に至りてや愈々支那式一名箱庭式の風景なる也予等は午後四時過ぎに出迎はれたる伊達清治君及商船會社取扱店主等と鞆港の對山館に投じ、行李を卸す間もなく直ちに見物に出掛け、先づ沼名前神社に詣し、小松寺の松を見、對潮樓より仙醉島を眺め、次に小舟を揺がして辨天島より仙醉島に至り、上陸して徘徊し、日没の頃歸館したり。

阿伏兔大黒岩

概説すれば、鞆は舊日本の要港にして、今や僅かに過去の名残を剩すのみ。其の港内に若干の和船の繋がる、を見れば、萬櫓林立、上船下船の大切なる

交叉點たりしを想ふ可く。其の上下し、屈曲し、幅狭き町も、本葺に瓦を葺きたるを見れば更に往時の面影を偲ぶ可し。唯だ此地の名産たりし保命酒と錨、釘は、今日に於ても愈よ繁昌し、鞆の生命たりと云へば、亦た以て人意を強うするに足るものあらむ。特に最近に福山と輕便鐵道開通する由なれば、愈よ妙ならむ。予は所謂る鍛冶屋町を逍遙し、其の錨や、釘の製造高の隆盛なのを見、實に意外の邊に意外の産業の開け居るに驚きたり。景色としては、鞆は寧ろ尾ノ道に駕す可し。何となれば鞆は玉津島、辨天島、仙醉島を眼前に見るのみならず更に島を隔て、内海一帯、併せて四國の群島、諸山を見るべき宏濶なる眼界を有すれば也。唯だ此の如き好風景の地にして、蚊の多きは、玉に瑕の類ならむ然も天下蚊多きの地多し、但だ此の如き好景多からず、豈に累を做すこと云はん哉。

——大正二年七月十日午後七時象頭山下に於て——(山水隨緣記より)

風景の一標式たる

靱の津仙酔島

内務省史蹟名勝天然紀念物考査員 國 府 犀 東

名勝地としての靱の津

仙酔島は優雅研麗にも申すべき風景の一つの標式である、海灣

の曲線が緩やかに盤旋して居るのこ、海面が内海だけに平波一碧の靜かな水紋を布いて居るここが普通であるのこ、島嶼が婉さしい圓やかな形狀を呈して、幾つかゞ點々相呼應して居るここ、其島嶼が主として石英粗面岩から出來て居るので、落ち付いた暗青色を帯びるのみならず、其斷層の露出



高棧敷洞窟

して居る箇所では、節理が几帳面に重なつた線を示して居るので、面白味を添へて居るのこ、今一つは其島嶼に松の美林が蔽ふて居るのこ、是等の景物が集成して居る一の名勝地である。
島嶼の上に辨天堂 なぎの人工物があるここや、市街との距離が、餘り遠くないので、人こ里を遠く離れた淋しい名勝地のやうに、親みの少くないのこ、全く違つて居る點も特色の一である。

廣島縣 では、日本三景の一として知らる、嚴島もある、備後の比婆、神石兩郡に亘れる帝釋川谷の名勝地もある、海面と島嶼と美林と人工物と相待ち、配合の妙を得て居る點に於ては嚴島は日本第一流の地位に立つべきものである、靱の津仙酔島も同様の配合から出來て居るけれども、嚴島と較べるには少し小規模である、それだけ親しみの多い一勝區である。

希釋峽 に較べるこ、全く別種のもので名勝地の最大要素たる風景の様式が、全然其根據を異にしてゐる、一は海面と島嶼と美林と人工物との配合から出來て居るものであるのに、一は峽谷と奇岩と山林と溪流との配合から出來て居るのである、隨て是は比較すべき素質の根

本から違がつて居る、全く違つた場合に立つべきものである。

風景の類似 した標式のものゝを擧げて見るに、先づ妙義山と寒霞溪と耶馬溪とが、三つ揃へにすべきものである。御嶽の昇仙峽、木曾の寢覺の床、備中の豪溪、備後の帝釋峽、長門の長門峽、是れも五つ同様の様式を示して居る。



大松浦五色岩

比類のない様式 鞆の津仙醉島の様な同型のもものは、全く外にはない、是れは單獨に一つの様式として見るべきものである。外に類がないといふことは、見様に依つては他に優越して居るといふ事を示して居る、優に婉さしい、そうして薄つべらでなく、軽やかでもなく、一種の上品な重味を有して居る點に於ては、海面と鳥嶼と

美林と人工物との配合宜しきを得た一つの様式として、他に比類のないものであることも言ひ得らるゝのである。

日本の三景といはれる松島や、嚴島や天橋立は何れも一個の様式を示して居るので、全く比類を見ないのである、日本の二大觀たる富士山と琵琶湖とは是れ又同様である、それと同じやうに鞆の津仙醉島が、優雅研麗なる風景の一つの様式を示して居るといふところが、他に優越して居ることを證明して居るものでなからうか。

風景の研究上、日本全國を通覽して見るのに他に比類のない特色を有して、全く別箇の様式を示すものほご貴いものはないのである、史蹟名勝天然紀念物保存法に據り國家が保存すべき名勝地として指定するには固より申分のないもの、一つであるに信する、吾輩は鞆の津仙醉島が早晚風景研究者、風景觀賞者の重視する所となるべきを疑はないのである。

名勝地としての仙酔島

東京帝國大學教授 理學博士 神 保 小 虎

東京帝國大學礦物科の神保博士と農商務省地質調査所の小前學士は内務省の名勝調査會の用務を以て大正十二年の夏仙酔島を調査せられ之を保護する心得に就き額町役場に於て講話せられた大要である。

名勝は優秀なる人工物と、自然現象を總稱するものにして、其範圍は頗る廣し、又其自然

の要素には、山野河海等の地形、岩石、植物、動物、氣象等ありて頗る複雑なり。

著るしき風景とは、之を眺望するに、必要なる地點をも成るべく保護せざるべからず。

交通の便開かる、に従つて、從來一地方のみに、知られたる名勝が、遠來の人を誘致すると

多く、又廣く他の名勝と比較せられて、從來の名聲を失ふものあり。

又大小の名勝を全部保護する時は、地方民の利益を害するこゝあり、故に最も土地の誇りと爲すべきもの、看る人をして趣味を高尙ならしむべき力あるものを選びて保護を加へざるべからず。

らす。

名勝の調査に於て、注目すべき多種の要素の中にて、地質礦物に關して調査すべき諸點を述べ、又其保護に關するに就き一言せん。

仙酔島に關して調査すべき名勝の要素は尙ほ他の専門より見る時は別に多くの箇條あるべし例へば島の風景を紹介して、來遊の念を

起さしむるには、其奇觀たるべき内容を説

明せざるべからず。單に(一)海岸線美し、

(二)森林青し、(三)山形可愛らし、(四)小

社ありて趣を添ふ、(五)平波一碧、(六)岩

石の色良ろしこ曰ふが如き數點を漠然と舉

ぐるのみにては足らず、特に日本にて唯一

の例なりこ曰ふが如きは最も精密なる説明



水 成 岩

を要するものなり。

仙酔島は地質學上にも見るべき點多し、一般に名勝地の地質に關して注目すべきことは第一に其土地を構成する岩石、其岩石の崩壞する形と變質する状態なり。

岩石は其色と模様を異にするのみならず、或は石柱を爲し、或は天然の橋を作り、或は材木を縦、横、斜に並べ積みたるが如き割れ方あり（仙酔島東岸の材木岩尙ほ直立のヒビ又少しく之より傾きて仙酔島に多きもの）薄き板を重ねたるが如きヒビ、四角又は不規則の形せる又箱を重ねたるが如きヒビもあり。

岩石が雨露に曝されて、崩れたる形にも、米俵の如きものを残すことあり、又仙酔島の如く丸るみ無き崩れ方を示すものあり。

波浪と流水が石を動かして岩石を削りたる形は、狭き溝、高き崖、丸き鍋の如き穴、窓の如き貫通せる洞、戸棚又は高棧敷の如きものあり、仙酔にも此等の例あり、然して此等の謂ゆる浸蝕なるものは岩石の割れ目に從て進むもの多しとす、又堅き岩石と軟き岩石の界の浸蝕に因

る一種の地形あり、故に風景の地質學上の議論には岩石の種類、其成因及び地質構造を基礎となす、又名勝の一たる瀑布も此等の點に於て各特色あり。

砂地には風に因て生じたる丘と凹みの奇景あり、又岩石地の表面には前記の諸形其他に注意すべし。

名勝を一見して其時の偶感に因り品評を加ふるは固より不可なり、精密なる調査と比較とを缺ぐべからず。

内務省の史蹟名勝天然紀念物調査會は保存要目の表を印刷せる外に植物の天然紀念物、地質礦物の紀念物、及び名勝に關する要目の解説を公にしたり、又調査の進行の爲め地質礦物に關する細目を造りたり。

或る名勝は特に植物の爲め顯はれ、或るものは動物により、地質により、又史蹟に依るものあり、又他のものは強ひて此等の何れにも偏らずして一見優秀なる點多し。

一地方に保護を加ふるに史蹟として保護するも、名勝としてするも、天然紀念物とするも結

其同様なるが、引きも其區域及び保護の方法に差違を生ずべし。

又繪葉書を以て風景を紹介せんご欲すれば、僅に人家稠密の都市の一隅に小く之を表はしたる寫眞にては充分ならず、成るべく特に一袋に入れたる「何々の名勝」ご曰ふものを造るべし、成るべくは其袋に略地圖を表はして、特に見物すべき地點の位置を示すべし。

大牛の鼻の洞窟

成るべく永く風景の味ひを感じしむる様、案内者の説明材料を造るが爲め奇岩、大木、懸崖、深淵、平野其他に面白き名を附して來觀者の話柄ごすべし。

仙醉島に來りたる人は何人も注意する如く殆んご全部縁にして禿を見るごご少く諸所に老樹あり、山形緩斜を呈すれごも岸は一体に懸崖多く、然るに其多少傾きて稍穩かなるは



一種の趣あり、岩崖にある松は海風にて怪しく曲り岩石には割れ目多くして海波の穿ちたる深き溝、廣き洞、眼鏡の如き穴、不規則なる箱を亂雜に積みたる形せる岩なごあり、又材木を立てたるが如き岩もあり、岩石の灰色なる中に特に赤紫の襷に似たる模様もあり。

又此島は單に笠を伏せたる形に非ずして東部に段地あり、又西側に少しく離れ且つ鞆ご殆んご密着せんごしたる辨天島も、段地の形にして机の如く然かも其岸は嶮岨なる岩石あり、又此島の上には小社あり、多くの石燈籠ありて風景を美化し得たり。

内務省より出張したる國府氏が寫眞せしめたる十數葉の風景寫眞は鞆の町役場にありて善く仙醉島の風景を詳かにす。

鞆の町長等の諸氏は余等を案内して此島の風景につきて前記の事實を説明せるごごは實地によく注意したるものなり。

余等が常に人に説く所は名勝保存の目的にて、廣く之を世に紹介し同情者を求むるは可なれごも、漫りに醜惡なるペンキ塗りの看板、亂雜なる小き賣店等を設け、又漫りに松林に踏み入

りて樹木の根を踏み固めて樹を枯死せしめざる等の注意なり、又風景の美化を企てて、無趣味なる花木を植ゐて、俗化せしむるとも大いに慎むべし。

名勝を廣告する技術、保管の方法、案内人の設備其他の委細は他地方の経験を調査して之に改良を加へたる案を立つることを要す、始めより新に考出するは時間の不経済にして且つ不利なる多し、他人の経験を各地に就て質し之に因て名勝保護の方法を講ずべきものなり。

五、俗謡にあらはれたる鞆

△鞆の向ひの仙醉島は、地から生ゐたか浮島か、地から生ゐもせぬ浮いても居らぬ、あれは殿様お立山。

△浮いた島なら流れもしようが、地から生ゐたか流りやせぬ。

△鞆の江の浦、庭箒いらぬ、小まい小女郎が裾ではなく。

△鞆の沖通りや二階からまねく、しかもかなこの振袖が。

△鞆の女郎衆は猿猴の生れ、足が短うて手が長い。

△鞆の女郎見て内の鼻見れば、千里奥山の古狸。

△鞆の女郎衆は招くが上手、千里沖のる船招く。

△鞆の港は源氏の港、潮の満干のない港。

△無事で田植して祇園にや御出で、祇園なづけに女郎買ひに。

△鞆へござるなら髪結ふてござれ、鞆は諸國のより合ひだ。

△鞆の港にや蛇がをるくこ、大きな蛇じやけな嘘じや(蛇)けな。

△鞆の江の浦の尾のない狐、誰も二三度だまされる。

△奉公するなら庄屋か寺か、鞆じや土佐屋や柳屋か。

△酒は酒屋によい茶は茶屋に、女郎は備後の鞆の津に。

△伊豫じや讃岐じやこ沖乗る船も女郎が招けば鞆に着く。

△鞆はよいこ東は海に、祇園嵐がそよくこ。

鞆 八景

對潮樓の秋の月、唐人も手を折りて、誰も目につく一の景、遙かに眺むれば仙酔の七浦、まだこけかぬる峯の雪、夜毎日毎に走り來る、入船に要害の番所に祇園の曙、星の浦の夜の雨港の燈籠に毎晩こもされる。

有磯町揚げ屋の名寄せ

開く扇屋廣島屋、姫路屋にこまる客、床は虎屋で口説して、夜はほこく饅頭屋、もぎる籠藤は明け鳥時分はよしの大可島、三山亭の戀をたのみ、穴ばさんに願をかけ、鞆の港に入り來る船の、心まかせよ。

名物づくし

鶉屋餅に、孫七そばきり、十六味の保命酒、平のかべりに油餅、祇園の下のかじや町、オバハン、シマイナハツタカ、フウ、チットハイリイー、コンナオバハン、イツコアイーナハツテ、オ手ニハアイナハラン。

名所づくし

祇園の景色八幡社、渡守神社にあじな櫻木、重盛小松に力石、外に寺々道つゞき、阿伏兔の觀音うしろ向、それをあまにかへりて、淀姫神社に玉津島、港めぐりて中之町、見渡す屋敷が福禪寺、關町に磯の室の木、沖にはさんさん大名船、黒門こしてはいれば、藝子やお山のね、女房はいらんせ。

ワシガ國サ

鞆の名所で見せたいものは、昔城山、今對潮樓、(合)辨天島には、皇后、津輕に阿伏兔の觀音、玉津島、イキな姿で波止場の涼み、(合)行きたいな、見せたいな、仙酔島には、十五夜の月、外に無いぞね、祇園の社、シヤンガエーナ。

伊豫節

鞆の名所は城山、醫王寺、小松寺には對潮樓、大可島には磯の室の木、さゝやきの橋に、千疊敷、陸奥の稻荷、安國寺、お釋迦堂には、おほせ置き、中國一の公園地、周り一里が六つ

の浦仙醉島。

鎗 鏑

鞆はさびても名所はさびぬ、昔變らぬ小松寺、エサーサ、重盛公の手植松。

夕ぐれ

夕ぐれに眺め見渡す鞆の浦、月に風情を對潮樓、帆あけた船が走るゾヨ、(合)仙醉過ぎれば
辨天、玉津島にや船が着く、鞆港、土産に銘酒があるわいな。

六、阿伏兔と口無の泊

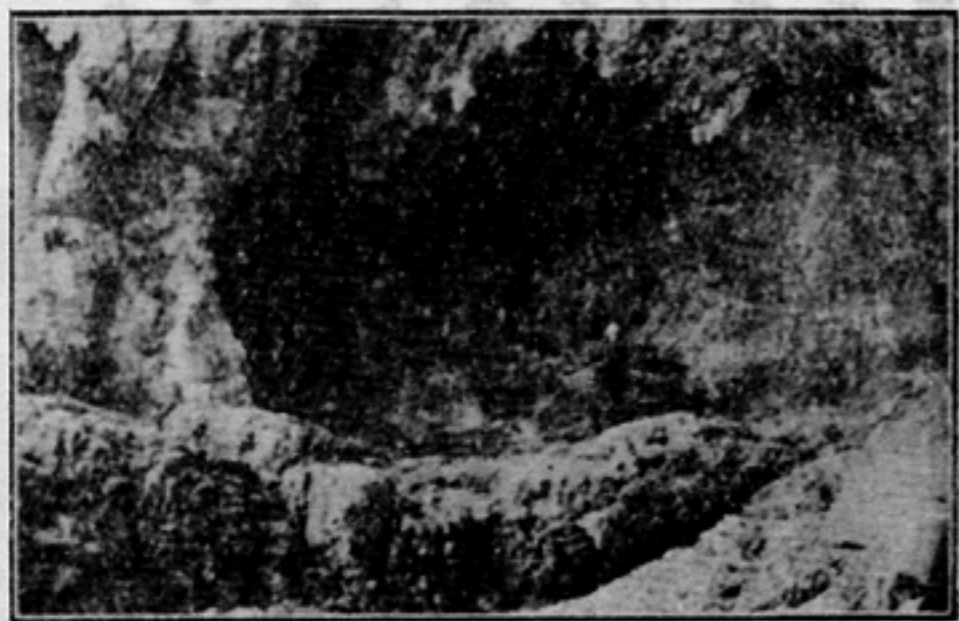
阿伏兔 鞆の西南一里、千年村能登原にある。海中に突出した崖上に大悲閣が設けられ

その奇景は内外人の嘆賞する所である。閣上からは遙かに森茫たる燧洋を隔て、眼界の美筆舌の盡す所でない。俯して脚下を見れば、物すごい程蒼黒くすんだ海上を帆かけ船が走つてゐる

欄干によつてゐるものゝ何だか股がふるふやうである。

大悲閣の由來について面白い傳説がある。元龜天正の頃、鞆津江の浦に三山次郎右衛門といふ漁夫が居つた。夙夜念佛唱名を絶たず。常に神佛を崇めて居つた。ところが或日夢の御告があつて、汝の信仰を奇特とし、爰に靈物三山の姓を授けるに、夢からさめて見れば、鹿角矢一双と雙六の賽があつた。次郎右衛門は早速紀州熊野三山へお禮詣りをした。

丁度その時土木工事があつたので進んで三箇月ばかりその工事へ奉仕して歸つて來た。或日阿伏兔沖へ漁に出て、しきりに網を投けてゐた。さうした事か、その日は幾度網を引いても一尾の魚もかゝらない。尙も網を投じてゐたところが、水中がキラ／＼と光つて、何やら上つて來た。よく見れば高さ二尺ばかりの觀世音の石像である



阿伏兔萬巖窟

腰の周りは両手で抱ゆる位もあつて、一の螺殻が附着して居る。そしてその殻の中には三十餘種の古銭があつた。

近海の漁夫たちは、目のあたりその奇瑞を見てびつくり仰天し、兎も角も次郎右衛門を援けて、能登原の寶大寺へ行つて、住職覺叟建智和尚に相談した。建智和尚は香華を供へ、阿伏兎の崖上にさゝやかなほこらを建て、安置した。その夜再び夢の告があつた。「これからは三山へ詣らないでも朝夕石佛を禮拜したらよい」云々。爾來香煙日々に盛んになつた。時の州牧毛利輝元が之を聞いて、建智和尚を開山として堂宇を建て、永代燈明料を寄附した。これが阿伏兎観音の始まりである。現今の堂宇は、元文三年軀奉行であつた加藤奎兵衛忠保が藩命によつて改築したものであるけれど、その後は何回も修補されたものである。天井畫は松林の筆である。堂下の盤臺寺は臨濟宗、本尊は木像の樂師如來。元龜年中に毛利輝元が船中で靈感ありて、大檀那となり、建智和尚を開山として建立せしめしもので寛文年中に水野公享保年中に阿部公が再建して居る。寺は備後西國三十三ヶ所第三番の札所で、又備後七ヶ所第九番の札所である。

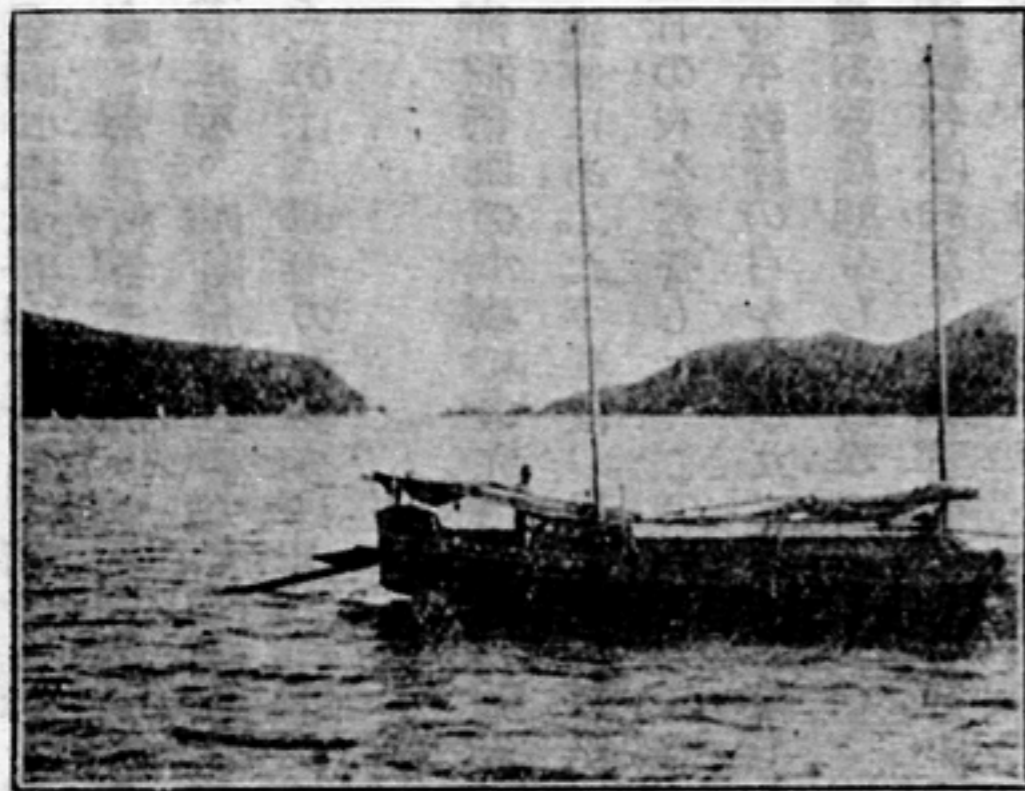
口無の泊

阿伏兎海峡から西、田島幸崎附近に至るまでの内海をいふ。東に梶子の瀬戸があつて燧洋の水を吞吐し、西に向島因島等が連つて、さながら湖水の觀を呈してゐる。

矢の島

平家の驍將能登守平教經が御座船を守つて檀の浦へ下る途中、能登原に寄泊した時其夜田島の方から源軍が白旗を押し立て、攻めて來るこ見わたので松にかけて居た弓をこつて二筋三筋射た然るに白旗を見わたのは篝火に驚いてたつた白鷺で矢叫びを思つたのは水禽の悲鳴であつた。

矢の島の竹は、この時教經の射た矢柄が芽を出して生じたものだ云傳説に残つて居る。



口無の泊

操いっのこ小島じま

敷名ミ岩船ミの中間にある、一小島、全川小松が生ひ茂つて居る。

組まいたせは組

田島幸崎ミ常石敷名ミの間の海中にある組のや

うに扁平な大なる岨である。西國九州の諸大名は参勤の時敷名の前を通過してゐたのに、藝州の淺野公だけは組組ミ幸崎の間を通過した。

弓ゆんかけのまつ懸松

千年村能登原の小學校の庭にある。文治元年

懸 二月十八日源義經の追撃にあふた平軍は、尾島からのがれて能登原に来て二十三日の夜を露營した。この時弓の名手ミし松て知られてゐた能登守平教經の弓をかけたミ傳ふる松である數百年の齡を重ね雅趣ある枝態をしてゐる。

千年藤

千年村敷名にある。治承三年三月十九日高倉

院が安藝國伊都伎島(嚴島)へ御幸され、四月一日この地を通



過して歸洛された。その時は岸に色深き藤の花が松の枝に咲きかゝつてゐたのを窺見ありて、「あの花を折つて來よ」ミ仰せられたから、大納言隆季卿が承つて、中原康貞をして折りこらせ、藤の花を松の枝につけながら參らせしこころ、非常に御感あり。この花で歌をよめミ仰せられたから大納言隆季卿は

千こせ經ん君がよはひは藤浪の

松の枝にもかゝりぬる哉

こよんで奉つたこいふこころが平家物語に出てゐる。當時の藤は今枯れて、植ゑつぎしたものが残つてゐる。

嚴島神社

千年村敷名にある。祭神は多岐理姫命、市杵島姫命で、應保年中の創祀である

應保年中彌生の頃。後白河上皇が安藝國嚴島へ御幸し給ふ時、國司備後守藤原爲成が行宮をこの地へ營んで迎へ奉つた。上皇は數日こゝへ御滞留の後、嚴島へ御幸され、御還幸の節もこの行宮に入らせ給ふた。その時、國司爲成に、嚴島明神の祠を此地へ建立せよミ勅せられ、御神

体として御手づから御鏡一面賜はつた。そこで爲成は勅を奉じて祠を建てたのである。こ社傳記に書いてある。

後白河上皇の行宮のこは平家物語にも見へてゐる。

備後表

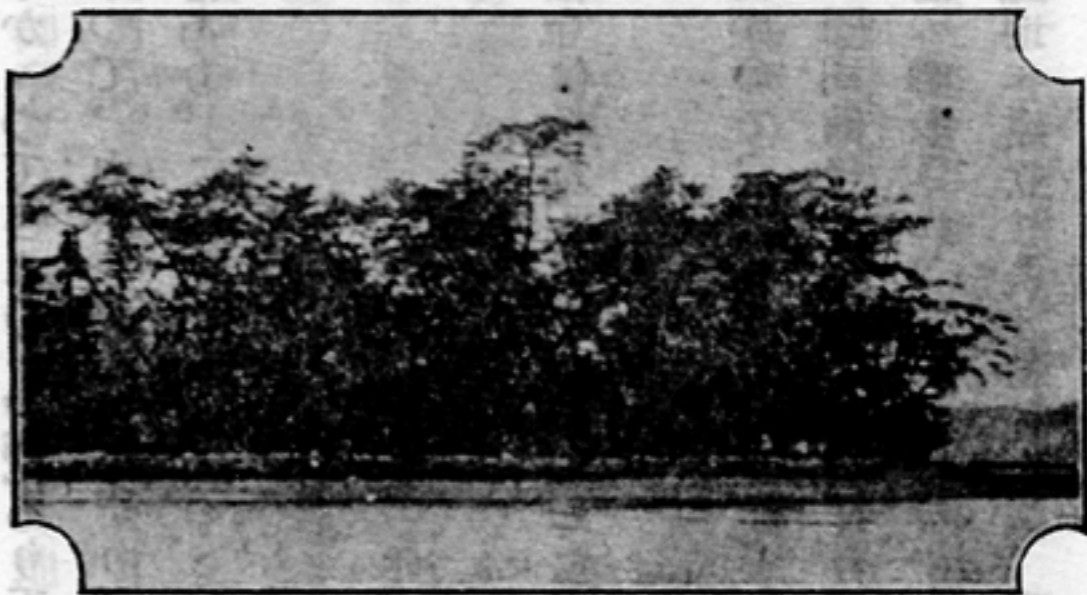
郡内到る所疊表を産す、就中千年、山南、熊野は本口疊表の本場として優良品を生産し全郡の生産年額二百萬枚三百萬圓に達して居る。

銘酒

本郡は近時銘酒の生産地として聲價を認められ一ケ年の醸造石數七千石に達して居る。

箱崎

阿伏兔の對岸、田島の東端にある岬である。斷崖絶壁の小丘で、その絶端は奇岩怪石が重なりあつて、上には海上に突き出た枝ぶりのよい松がある。これが鳶の巢と呼ばれてゐるこころである。



大浦の海岸

約百年の昔文化五年正月に、こへ白雉が居つたのを水呑の人が捕へて、同年三月に幕府へ献上したこいふこころがある。

大浦八幡神社

田島村大浦の海岸にある。祭神は、應神天皇・姫大神で、宇多天皇の寛平四年九月に創祀したものである。

治承四年高倉院が嚴島御幸の時、當社へ參拜ましませしこころがある。その時白藤の咲きほつてゐるのを御覽じて、御感斜ならず、社號を藤島八幡宮と賜はつたこのこころである。

宮は山を負ひ、海に臨み、趣致豊かな老松が境内に生ひ茂つて、風景が非常によい。

影向松

田島村町奥ノ坊にある。幹周一丈一尺、蜿蜒として龍蛇のわだかまつてゐるやうな老松で、高倉院の御手植といつて居る。

高島宮趾

神武天皇御東征のみぎり、數年間聖蹕をこつめられ、兵を練り糧を蓄へられた吉備高島の遺蹟は田島であるこ唱へられてゐる。これは高洲兼田明逸氏の主唱するこころ。

皇太子宮は神武帝を祀る、境内に棕の老樹あり周圍三丈日本老樹名木の番附に入る。

田島大根と煮干鱈

田島に産する大根と箱崎の煮干鱈は品質優良にして美味なるを以て名聲を博して居る。

樟と巨岩 横島村には八幡神社の境内に二本の樟がある一本は幹圍一丈八尺二寸、一本は一丈六尺ある。又同村字己の浦には甚九岩と稱する凡六十疊敷位の巨岩がある。

七、田尻と水香

田尻海水浴場

高島宮趾 吉備高島の遺蹟は、上古の史實より探究してさうしても芦田川河口でなくてはならぬと論斷し、その宮趾を田尻・水香一帯の地であること考證し主張して居るものは鶴濱本清一氏である。

田尻海水浴場 田尻村高濱にある。寛永の末、福山城



主水野勝が海水浴をなし且つ潮風爐を設けて、疝を療した由緒あるところである。竈の跡が今も残つて居る。明治二十四年海水浴場を設けてから、年を逐ふて繁昌し、夏季は浴客が輻輳する、高島館その他の海水浴場又納涼臺がある。鞆輕便田尻驛から東三町。

田尻の杏花 全村殆んど屋敷の周圍又田畑の隅々に杏を植ゐてゐない所はないので、花期の壯觀は格別である。毎年三月二十五六日頃から蕾が綻び初め、神武天皇祭頃が最も見頃である。

田尻南瓜 その風味の良いもの、その産額の多い點に於て、古來田尻南瓜の名が高い。

これが起源は、約三百年の昔、寛永十五年正月、福山城主水野勝成が島原出征の時従軍した、忠右衛門なるものが歸國



田尻の杏花

する時に薩摩の國から、南瓜の種を持つて歸つたのに始まる。その後、文化文政の頃、藩公の

獎勵によつて、種子を改良し、従前の大南瓜を、今の縮緬南

瓜に改め、夏季畑作の主要作物にした。

松楊 らしやのみ 周圍七八尺の名木松楊が二樹ある、落葉樹で夏

箕 み 季は鬱蒼として遠方からよく見ゆる。

箕島 みしま 水呑村芦田河口にある。昔は巨樟老松等が森々
として繁茂して居つたのを、水野家斷絶の時、奸商が濫伐し
て罪に問はれた。釣りの適地として行く者が多い。

備後編 水呑・田尻を中心に産出されて逐年盛況を呈

し來つて居る。大正十年の調査によれば、製造戸數六十三、
一ヶ年製産高百四十二萬六千二百八十一反、價額三百六十三
萬九千六百二十八圓である。



水呑海苔

芦田川口竹ヶ端に於て栽培され、改良を加へた結果、その聲價大いに認められ
その販路は中國は勿論、京阪四國九州から遠く支那方面迄も及んでゐる。年産額約十萬圓。

妙顯寺

日蓮宗、西龍華中本山にして、本尊は釋迦牟尼佛である。延文元年一乘妙性上
人の開基で、二つ御判の曼荼羅があるので有名である。その他當寺の寶物としては、一乘の銘
のある。小狐丸の刀、菅公筆を傳へられてゐる紺紙銀泥の法華經神力品第二十一、日耀上人及
日尊上人の鑑定書について居る宗祖日蓮上人の眞筆等がある。

妙見堂

水呑村洗谷妙見驛の背後金鷄山の山上にある。毎月午の日に遠近からの信徒が
雲集する、夜は磴道に電燈が點され、詣人が絶われない。欄によつて俯瞰すれば、福山市は一目
の中に入り、うねすわしてゐる芦田川の流れの海に入つてゐるところに、箕島が築山のやうに
横はつてゐるのなご何ともいへぬ好い眺めである。

八、走 島

唐船

島の南端の一角である。もこ洞仙浦に書いてゐた。室町時代に、下關と堺港との聯鎖港として榮へ、支那町・京町なごあつて、妓樓等もあつたが、地震や海嘯等のために浸蝕されて海中に没してしまつた。白砂青松の地で、景色もよく、海水浴に適してゐる。

村上家

その祖、村上太郎兵衛義光が元和九年に水野家から、走島及其の枝島を拜領して移住したものである。爾來、代々走島の庄屋をして、島民を愛撫するここは子の如く、島民も亦尊敬するここは主君の如く、主従の關係をして情誼掬すべきものがあつた。家の庭にある大蘇鐵及門前にある馬場の跡等は昔の面影を語るものである。

潑刺たる鮮魚

燧洋は瀬戸内海唯一の漁場で無盡蔵の寶庫である走島から百貫島附近にかけての漁場から捕獲される漁獲物は年々數十萬圓に上り鞆を始め此の地方では四季を通じて潑刺たる鮮魚が食膳に供せられる。

九、鞆津遊覽者の棧**宿泊料**

鞆に於ける一流旅館の宿泊料(一泊一食)は一等五圓、二等四圓、三等參圓五拾錢、其他は參圓乃至貳圓五拾錢になつて居る。晝食は總て宿泊料の半額が規定になつて居るが晝食だけの仕度なら壹圓五六拾錢位。仙醉島の簡易食堂では中食が五拾錢位、二流以下の旅館に於ける宿泊料は之よりずつこ安くなつて居る。

借間料

仙醉島に於ける借間料は夏期一ヶ月六疊一間貳拾八圓、瓦斯水道使用料貳圓を要するが三四月頃から申込んで置かぬと満員となる。

合宿所

夏期海水浴の爲に團體で宿泊する場合には寺院等が進んで宿舍を提供せられる料金等は人員に依り多少の相違があるのでそう云ふ際は鞆津保勝會へ豫め照會して置けば便利を與へられる。

モーターボートの賃金

仙醉島を一週するには八人迄の賃金貳圓、以上一人を増す毎に拾五錢増。鞆から仙醉島へ渡るのが一人拾五錢。阿伏兔詣は鞆から八人迄が參圓、以上一人を増す毎に參拾錢。

鞆より主要地に至る里程と賃金

(三等片道)

地名	起点—經由地	機關	里程	回数	賃金
鞆	港	人力車	一三〇	可	三〇
鞆町役場	同	同	九、半	同	二五
沼名前神社	同	同	九	同	二五
對潮樓	同	同	一〇	同	三〇
阿伏屯觀音	同	人力車	二、一六	同	九六
	同	モーター	二、一六	同	二〇〇
	同	發動機船	陸	二	三〇
	同	モーター	海	二	二〇〇
仙醉島	關ノ濱	渡船	三	隨時	一五五
走島	鞆港	發動機船	三海里	一回	三五〇
	同	和船	三海里	一回	三五〇
多度津	同	汽船	一〇	三回	八六
琴平	同	同	一三	三回	一〇五

地名	經由地	機關	里程	回数	賃金
高松	同	同	一八	三回	一、一六
尾道	福山經由	汽船	五	二回	四〇
	同	汽船	五	七回	七四
吳	同	汽船	三	七回	二、一四
	同	汽船	三	七回	一、五六
廣島	同	汽船	三〇	七回	一、九七
	同	汽船	三〇	七回	一、九七
福山	鞆驛	汽船	三	七回	三九
備後府中	同	同	八	同	五六
笠岡	福山經由	汽船	四、半	七回	五五
	同	發動機船	四、半	七回	五〇
岡山	福山經由	汽船	一八	七回	一、三二
神戸	同	汽船	八〇	同	三、一六
大阪	同	汽船	九〇	同	二、七五
東京	同	同	二四七	同	八、一一

此の小冊子を刊行する迄

澤山ある材料の中から廉價で而かも氣の利いた献立表に依り精選されたお料理を提供したい
計畫を立てて編纂したのが此の小冊子『鞆津と阿伏兔』であります。

捨てるには惜し、されば云つて餘り餘計に並び立てては立派なお料理も反つて鼻につく。
そこに料理人である編者の苦心があつた。

献立が出来上るに一應地方郷土史界の權威である本會同人濱本鶴賓君の校閲を經、遅くも七
月上旬には出版の運びになつたが一面商工業内の準備が、ふ様に運ばず遂に今日に至つた。

『商工業内』加盟者の勧誘は此の冊子を出版するのに唯一の資源であるだけ夫れだけ重大なる
事業であつた。本會員田頭只一君が村上春江君、大濱政男君の應援を得て専ら其の任に當つた
事を感謝する。

本誌に採録せる寫真版の多くは鞆町式見信近君の撮影寄贈に係るもの附圖は小川秀雄君の調
製に係るもの共に茲に特記して謝意を表する。

卷頭に沼名前神社宮司金原利道氏の序文を得たるは深く本書の光榮とし謝意を表する。

大正十三年八月上院

編者

備後名所鞆津と阿伏兔 (終)

附録

鞆商工業案内

銀行會社

株式會社 鞆 銀行 行長電一〇番

株式會社 鞆 輕便鐵道株式會社 長電二〇番

株式會社 桑田銀行鞆支店 長電四〇番

株式會社 山岡銀行鞆出張所

共益無盡株式會社鞆代理店

主任 平野良輔

廣島電氣株式會社 鞆 出張所 長電一六番

保命酒醸造並小賣

株式會社 鞆 保命酒屋 長電一五番

岡本保命酒合名會社 長電一一番

森田商會 長電四番

巴印味淋白酒醸造元

入江豊三郎 長電二三番

本家保命酒販賣所地石炭問屋

八田種松

旅館料亭

對山館 長電四五番

吸霞亭 長電一〇九番

星ノ浦館

彦浦館

仙 醉 亭

靱仙醉貸問經營社

三 島 旅 館

と き は 旅 館 長電三二番

向 井 旅 館

佐度利事 高橋喜三郎

丑 田 旅 館

御料理支度・麵類一切

東 京 庵

交 通 業

大阪商船會社

靱津荷客扱店長電一四番

篠原廻漕店長電六二番

酒 類 醬 油

八木廻漕店長電六五番

まつせ醬油醸造元 岡本武次郎長電二六番

清酒醸造元 石井酒場長電三六番

醬油醸造元 岡本酒店

米雜穀卸商・醬油醸造元 沖浦勝之助

片岡岩吉

醫 院

德永醫院長電五三番

太田醫院長電一八番

倉田醫院長電二〇六番

鐵 工 業

伊達仁濟醫院 長電三七番

藤井齒科分院 長電七五番

小林鍼術治療所

靱錨釘合名會社 長電一九番

吉本太兵衛商店 長電三五番

本園田鐵工所 長電四二番

門田鐵工所

靱金物製作所 長電五五番

材 木 ・ 石 炭 商

材木・石炭商

佐藤友三 長電三九番

荒 物 商

材木・建具商

北山恒次 長電六三番

特許丸形刷子發賣元・萬荒物卸商

松本芳兵衛

陶器・荒物商

魚萬事

木村祐三

荒物商

長林商店

食 料 品

八千代生命保險株式事務取扱所

菅德食料店 長電五八番

食料品各種

石藤商店

米穀・薪炭・日用品

岩谷常吉

穀物商

野村賢作 長電一七番

米雜穀商

村上虎之助

船具・漁網業

關西漁網船具合名會社 長電二二番

澤村船具店 電電三番

鞆製網合資會社 長電三〇番

內外編糸・麻糸商 太田糸店 長電五一番

ろやスツホンマニラロープカイヤロープ・船具一式

相原多次郎

造船業

宮地造船所

藤原造船所

雜貨商

小間物・化粧品 中村龍雄

保命酒・藥品・化粧品 ほていや

舶來雜貨・婦人小間物 小田庄之助 電 五八番

菓子商

菓子製造元 末廣堂

菓子製造元 三谷福助堂 電話一〇七番

茶菓子商 欣榮堂

雜

疊表花莖上敷類 山根源助 長電四六番

瓶名産祇園燒御盃製造元

有地新一

生魚カマボコ商

魚久事 原田久一 長電二八番

貸ボート並遊覽船 小川源吉

阿伏兔・仙醉島行モーターボート

安田政吉

書籍・雜誌・文具・繪はがき

原田潮花堂 電一〇五番

書籍諸雜誌文具・日用品

柳井桂園堂

諸新聞取次 柳原新聞鋪

玉突 巴俱樂部

瓶酢花の浪釀造元 酒井酢店 長電一番

製氷木炭商 合名會社産業商會

石材石碑並石燈籠石細工一切

石久事 片岡小太郎

貴金屬販賣・金銀細工

銀喜事 藤原時計店

履物商 酒井敬三

輛ラムネ製造業 吉村商店

八木活版所

吳服太物商 加藤清助

紙商 神原甚兵衛

貸ボート並遊覽船 桑田榮次郎

千年村商工業案内

千年交通株式會社 長電七四番

三谷齒科醫院

處方調劑・藥品・衛生材料・賣藥

三谷藥局

清酒男一釀造元 岡崎泰藏 長電七四番

養老正宗・山吹醬油釀造元

門田利三郎 長電七二番

豐金正宗釀造元 村上酒造場 長電二番

千代鶴・壽正宗・春部光釀造元

佐藤酒場

阿伏兔正宗釀造元 三好鹿太郎

岡崎齒科醫院

自轉車・時計並賣藥

池岡商會

各種自轉車々體製作並修繕所

神吉商店

阿伏兔ラムネ製造元

内海商會

疊表花起上敷商

高田新四郎

同

門田格一 長電七三番

株式會社松永實業銀行千年支店

疊表商

三谷千代吉

田尻海水浴案内

海水浴場

高島海上納涼臺

同

桑田月光亭

旅館・海水浴場並日用品商

對仙館海水浴場

大正十三年八月十二日印刷
大正十三年八月十五日發行

備後名所輒津之阿伏兔

定價金貳拾五錢

不許
複製

編輯者

湯川大三郎
村田靜太郎
村田靜太郎

發行者

廣島縣沼隈郡松永町七二四番地

印刷者

光延義民

印刷所

光社

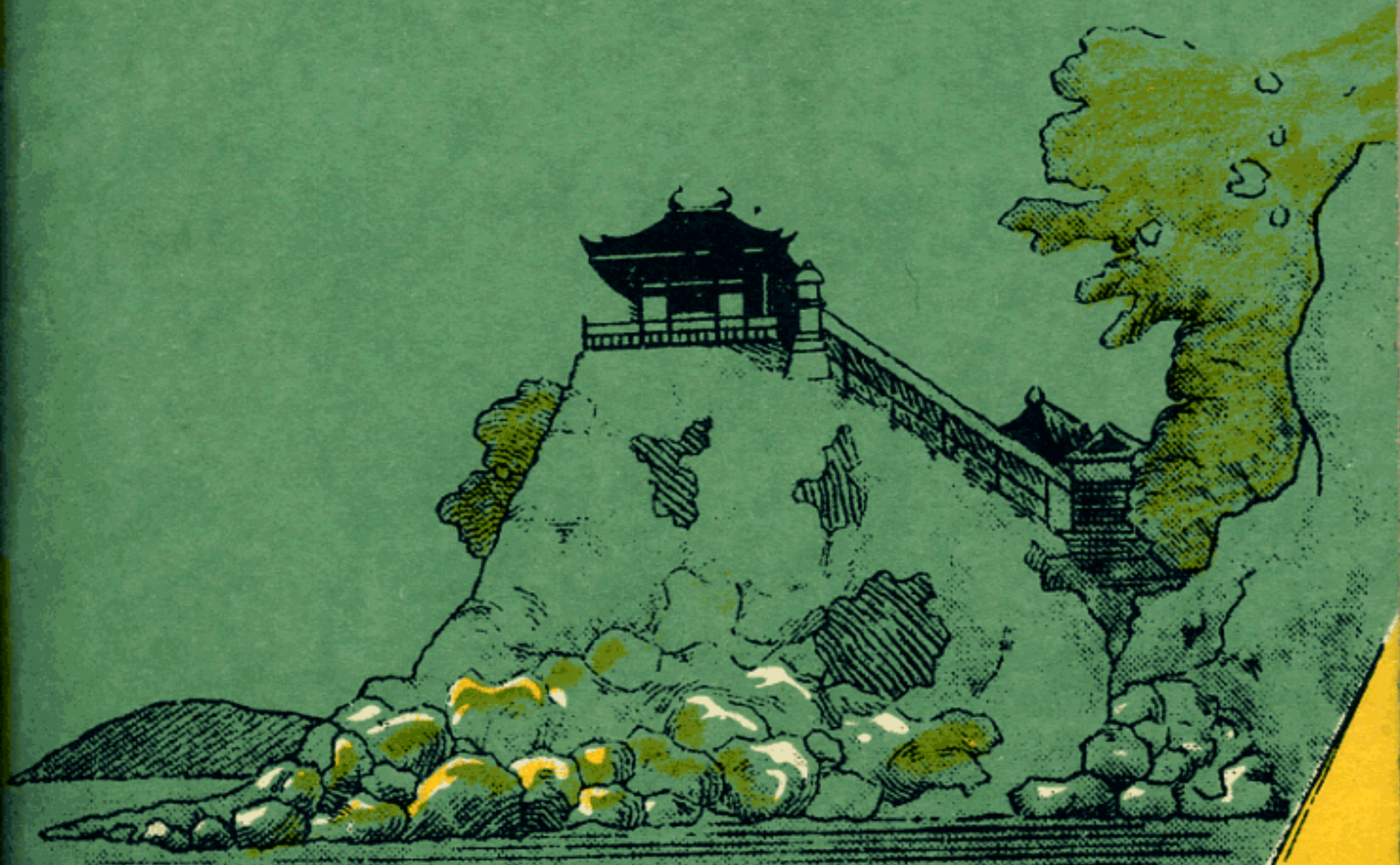
大阪市外中津町下三番五三番地

發行所

廣島縣沼隈郡松永町

先憂會出版部

振替大坂二二三六三番



保命酒八

本家木林田製造



印ニ
限ル